

# 教育論考

～新・教育協働への道～

(総集版)

Part 4

教育協働研究所

～岳陽舎～

井上 講 四

2025年6月

※本「新・教育協働への道（総集版）Part 4」は、先に作成している「新・教育協働への道（総集版）Part 1」（2023年8月）、「新・教育協働への道（総集版）Part 2」（2024年1月）、「新・教育協働への道（総集版）Part 3」（2024年10月）に続くもので、令和6年10月から書き始めた「新・教育協働への道」（31～40）を、一部修正の上、総集したものです。改めて、よろしくご笑覧下さい。

※連絡先

ホームページの URL⇒<http://www.gakuyou.jp>

メール・アドレス ⇒[gakuyou17@outlook.jp](mailto:gakuyou17@outlook.jp)

## 目 次

- 31 もう既に始めているところがある！流石だ！だが、もう一つの視点が弱い?! ..... 1
- 32 「教育協働」の最前線？重要なことは、「3 T」を協働で生み出すことである?! ..... 5
- 33 「教育協働」の眼目（ゴール）は、「普通の上等」を作り出していくことでも?! ..... 9
- 34 第 45 回「日本生涯教育学会」大会に参加して！今回は、意外な収穫もあった?! ..... 13
- 35 “保育園留学”！またここに、新たな形（意義と可能性）が見える?! ..... 17
- 36（私達の）「社会教育」とは何だったのか？だが、その本質は変わりようがない?! ..... 21
- 37「教育」の要諦は、「ティーチング」か？それとも「コーチング」か?! ..... 25
- 38 教育！その「混迷」から、いかに「脱出」すればよいのか?! ..... 29
- 39 社会教育の「再設計」?!それは何？そして、それをどのように進めたらよいのか?! ..... 33
- 40「教育」の未来?!厳しいが、「思いある人達」がいる限り、それは創られていく?! ..... 37

### 31 もう既に始めているところがある！流石だ！だが、もう一つの視点が弱い？！

#### (1)新しい学校づくりを推進する渋谷区、「シブヤ未来科」の挑戦

さて、早速であるが、ここでは、先号(30)で紹介した、東京都渋谷区の取り組みについて、詳しく見てみたい！いつものように、パソコンでネット記事を追っていると、とんでもない記事に出くわしたわけであるが、それは、標記のような見出しで始まっていた！

以下、引用すると、「東京都渋谷区の区立小中学校では、2024度より探究学習『シブヤ未来科』がスタート。『午後の授業時間を丸ごと探究学習に充てる』という大胆なカリキュラムは、世間を驚かせました。保護者として気になるのは、どのようなカリキュラムなのか、そして、通常の教科学習や進学・受験への影響はないのかということ。

…『シブヤ未来科』のコンセプトや概要について、渋谷区では、渋谷区基本構想で掲げる未来像『ちがいを ちからに 変える街。渋谷区』の実現のため、『未来の学校』プロジェクトをハード・ソフトの両面で進めてきました。ハード面では、今後20年間かけて区立小中学校校舎の建て替えを行います。一方、ソフト面で取り組むのが、教育DX、そして探究学習『シブヤ未来科』です。」とある。

続いて、「これからの時代を生きていく子どもたちには、どのような資質・能力が必要かという議論は、国内外で活発に行われてきました。文部科学省の学習指導要領やOECDがまとめたEducation2030 projectでは、自ら問いを見つけ課題を解決する力、対立やジレンマがあるなか他者と協働して新たな価値を生み出す力などが強調されています。

こうした背景があったうえで、渋谷区としては、『自ら考え判断して学び続ける自己調整力』『多様な仲間と協働して新たな価値を生み出す創造力』『自分が思い描く未来を実現する挑戦力』の3つを、未来を生きるために必要な力と定めています。これらの力を育むために探究学習・シブヤ未来科をスタートさせました」となっている。

さらには、「探究学習とは、自分が興味・関心のあるテーマについて自ら問いを立て、知識や情報を収集・整理したりアクションを起こしたりしながら深めていく学びのこと。シブヤ未来科では、児童生徒一人ひとりが探究するテーマを自分で決め、「My探究」に取り組みます。企業や地域の協力による体験学習の機会も多く、探究活動を通して、自己調整力や創造力、挑戦力を育てていきます。

昨年度、先駆けて探究学習をスタートさせたモデル校では、ギターがうまくなる方法をひたすら探究する生徒、ダンスに打ち込む生徒など、それぞれが好きなことに取り組む姿が見られました。また、『環境にやさしい未来の学校づ

くり』をテーマに My 探究に取り組んだある児童は、資料を調べたり社会科や理科で学んだ知識を活かしたりしながら校舎やエコシステムの要件を整理し、似たテーマの友だちと意見交換をしながら、教育版マイクラフトで理想の学校を表現しました。

このように自分の好きを突き詰めることから始めて、最終的には、それらを地域や社会のニーズや困りごとに掛け合わせるような課題設定ができるようになるというなと考えています」というような、行政担当者の言も、合わせて載せてあった！

とにかく、私にしてみれば、何とも驚くべき情報であり、一方では、「もう既に始めているところがある！流石だ！」という思いもある！やれば出来るのであり（関係者には、大変失礼な物言いではあるが？）、これからは、もっともっと、こうした取り組みを始める学校（地域／市区町村）が現れて欲しいと思う次第でもある！

要は、まさにこの取り組みは、これからの（我が国の）学校のあり方を提示しているということである？！

## **(2) 教員の働き方改革や不登校対策はどうなっているか？もちろん、いじめ対策も？！**

そこで、この取り組みに採り入れられている幾つかの工夫（挑戦？）であるが、まずは、「授業時数特例校制度」の導入である。詳しくは分からないが、それを活用して、「総合的な学習の時間（探求学習）」を倍増させ、それを、「シブヤ未来科」の核としているということである。

基本的には、それを午後の授業時間に充て、授業時間数を調整するため、26校ある全区立小中学校で、文部科学省が定める「授業時数特例校制度」の認可を取得し、主要教科（週1時間の教科などを除く教科）の時数を最大1割カットし、学校設定科目等に置き換えるということである。

つまり、カットした時数を、その「総合的な学習の時間（探求学習）」にあて、その時間を、「シブヤ未来科」の核としているわけである。例えば、小学6年生では、学習指導要領に定められた総合的な学習の時間の標準時数は70時間（週2時間）であるが、これを、2倍以上の155時間とし、それに加えて、教科、特別活動、道徳、学校行事の一部などをそれに位置づけ、トータルの時間数を、さらに多くしているということである。

主要教科の時数を1割カットした結果、履修範囲が終わらないなどの問題はないのかについては、計画段階では、現場の教員や地域、保護者の間で懸念する声もあったが、教科書の指導内容は、もともと標準時数の9割程度に収まる量になっているため、学習すべき内容は、基本的には授業時間内で押さえられると考えられている。

一方で、学年や科目によっては、従来の9割の時間に圧縮するのが難しいも

のもあり、そこは各学校長の判断のもと工夫されることになっているらしい。例えば、小学5年生の算数のグラフの単元は、探究学習で使う統計の要素を含むので、そこで、単元の一部の発展的な内容を探究基礎として位置付け、総合的な学習の時間で取り扱っている学校もあるということである。

また、中学3年生も、「My 探究（探求学習）」に取り組むが、高校受験への影響が気になることについては、「探究は独立したものではなく、教科と密接に関わるものであり、受験においてはむしろ好影響がある。…探究と教科とを切り離して考えることはしていません。探究の場で、教科の内容がどのようなシーンで役立つかを実感できれば、教科学習へのモチベーションも上がるでしょう。実際、モデル校を対象にした調査でも、教科学習に対する姿勢に変化が見られた、より意欲的、主体的に取り組むようになったという報告があります。

なかには、まだ肌感覚ですが、定期考査の成績が全体として良くなっていると感じるという声もあります。また、昨今の入試は、知識・技能だけでなく、思考力・判断力・表現力が試されるものになってきています。こうした力は、まさに主体的に取り組む探究を通して育まれる」ともある。

### **(3)問題は、そこに、社会教育（行政）がどう関わっている（くる）かである?!**

そして、「これからの時代を生きるための力といっても、なかなかイメージがしづらくもあるでしょう。当初は地域や保護者の皆さんの理解が得られるだろうかという懸念もありました。

しかし渋谷区としても、各学校としても、積極的に探究の意義や取り組みについて発信してきたこともあり、一定の理解や支持を得られていると考えています。また、学びに向かう姿勢や非認知能力といった数値化が難しいものについても、振り返り用のアプリケーションを作成し、子どもたちに定期的に回答してもらい効果検証を続けています。これまでに大きな問題やクレームなどはなく、むしろ保護者からはポジティブな反応のほうが多い」。

さらには、「PTAを通して届く保護者の意見・感想で特に多いのが、子どもが自宅で学校の話をするが増えた、という声です。PTAの方々からも、自分たちも子どもたちの学びを応援したい、積極的に関わりたいという力強い声をいただいています。一方で、「連携先の企業や地域の方々は、のべ300あまりに上り、社会全体で子どもを育てるといふ私たちの思いに共感してくださる方が多く、ありがたい限りです」。

シブヤ未来科の取り組みについて、全国の自治体からの視察や問い合わせが相次いでいるという渋谷区。最後に、「日本の教育を渋谷区から変えていきたい」と。何と言う視野、考え方なのであろうか！

だが、ここで冷静に受け止めると、この渋谷区の動きは、私が長年唱えてきた、そして近年煮詰めてきた「教育協働」、そこにおける「学校教育の具体的な姿・形」そのものではないか（かの「合校」と同根!）?!要は、教員の働き方

改革（部活の外部（地域）委託等を含む）、CS・地域学校協働本部事業等、これまでも幾多の事業やシステム提案がなされてきたが（そして部分的には、かつて実践されていたが！）、その中で欲しかった（必要だった）のは、学校の教育課程の、言わば抜本的な変更であったわけである（「カリキュラムマネジメント」ということも言われてきたが、授業や時間割の発想自体の転換が必要であったわけである?!）！

すなわち、ここで評価されることは、新たな位置づけがなされたのかもしれないが（→「探求」）、いつのまにか評判が落ちていた（時数も減らされていた）、かの「総合的な学習の時間」を新たに蘇らせ（時数を増やし）、その意義と可能性を、しかも、地域との連携やDXの活用という形で、実現させようとしているということである！

ただし、ある意味、まったく新たな戦術を取り出したということではなく、これまでの取り組みの成果（反省を含む?）を、総体として活かしていこうとするものとも言える（朝令暮改ではない?）?!ただ、やはりそこには、教職員の労働時間の問題ややり甲斐、納得の問題が残る！ここをクリアしなければ、結局は、元の本阿弥である！だから、じっくりと、腰を据えてやっていくしかない！

言い換えれば、短絡的な評価を下すべきではないということであるが、そこに欲しいのは、地域との連携の強化である！と言うより、公民館や図書館、博物館、あるいは青少年教育施設との連携・協力の意義と可能性を、もっと前面に出して欲しいということである！

こちらがないと、これまでもそうであったが、教職員の負担（感）の軽減や成果の共有（感）につながらない！また、社会教育関係者の、一致団結した協力関係も築きにくい（もちろん、そこには、PTAや子ども会等の、社会教育関係団体の新たな協力関係も含まれる!）！

最後に、このように膨らませていけば、何か壮大で、しかも、ある意味昔に戻るような取り組みに見えるかもしれないが、今、必要なのは、そこに、核（軸）となるしくみ（結節点）を創ること、あるいは新しい時代状況に合うような全体ビジョンを構築することである！

私は、その突破口（転換点）となるのが、今回の渋谷区のような取り組み、しくみづくりであると思うのである！これまでの隘路や不十分さは、まさに、そこに起因していたと思うのである！ただし、踏み出した直後の忙しさは、当然ある！だが、繰り返すように、それが、納得した忙しさなのかどうかの問題なのである（忙しくない仕事はないのである!）

（つづく）

32 「教育協働」の最前線？重要なことは、「3 T」を協働で生み出すことである？！

(1) 懐かしき「PW3 T論」！しかし、これは、何も社会教育側の専売特許ではない？！

もう随分前のことであるが、ここでも、「PW3 T論」という怪しげな理論（エピソード？）を紹介したことがある？！それは、ある大学の名物教授（故人）の自説（パロディ表現？）であったが、私の、R大学赴任前の職場（当時名：国立社会教育研修所）での、したがって、若き日の（そうでもないか？）思い出となっているものの一つである！

何故か、ずっと心に残っていて、その後、私も、彼に倣って（パクって）、「P I 3 T論」ということで、ある時の受講学生達に、その論（エピソード？）を紹介していたが、今、改めて、このことが、まさに「教育協働」の意義を導く論理となっていくのではないかと思っているということである！

ちなみに、お分かりだと思うが、PW（I）とは、プロフェッサーW（I）ということであり、3 Tとは、「ためになること」「大切なこと」「楽しいこと」の頭文字である！遊び心（言葉遊び）が過ぎるとい批判もあろうが（学問的ではない？）、私としては、改めてじっくりするものがあるということである！

要するに、「教育」とは、学習者（人間）にとっての「大切なこと」「ためになること」、そして「楽しいこと」を企画（プログラム化）し、それを提供することだということであるが、ただ、学校教育（小中高）の場合は、例の「学習指導要領」というものに則った「教育課程（カリキュラム）」によって、そのことが実現されることになっているので、「大切なこと」「ためになること」はともかく、「楽しいこと」は、なかなかイメージし辛いものとなってきた（だから、それは、社会教育側の専売特許ともされた？しかし、それが、ただ遊んでいるだけというような誹りも受けた？）？！

「レクリエーション」というものが、そうした印象をもたらしたとも言えるが、実は、そこにも、「大切なこと」「ためになること」は、多々あった（る）のである？！

まあ、それはともかく、問題は、今、何故、こういうことを言い出すのかであるが、最近の学校教育においても、この「3 T」が採り上げられ（尤も、表現は違うが→「主体的・対話的で深い学び」）、やはり、これは、教育／学習の普遍的な意義なのではないかと思うからである！

新しく設定された「探求学習」（総合的な学習の時間）が、その顕著な例であるが、各地の「実践例」においては（もちろん取捨選択されてはいるであろうが！）、ある意味、その「3 T」が実現されていると思うからである！自ら課題（テーマ）を発見し、それを仲間と共に考え、発表し合い、その解決策等を見出していく！それが、「大切なこと（の発見）」「ためになること（の実感）」、そして、

「楽しいこと（の実現）」へとつながって（循環して）いくのである！

もちろん、ここでの「楽しいこと」とは、遊びながら、気楽に、そして自分勝手にやることではない！「分かろうとすること」「仲間と一緒にやること」、そして、「そこから得られる充実感」の総体である！しかも、そこに、いわゆる「知識」「技能」「態度」（最近の「評価」の枠組みは、少し異なっているようだが？）の習得のプロセスが複合的・重層的に組み込まれているのである！それが、まさしく教育／学習の神髄なのである！

ちなみに、教育を伴わない学習（自己教育？）という捉え方もあろうが、そしてまた、その教育を伴わない学習が、最も価値ある学習と言われるかもしれないが、実は、その学習さえもが、何らかの教育（家庭、地域、学校等）のお陰（成果）で実現しているものである！だから、「人間は、教育によってのみ人間となる！」（J. ルソー）ということにもなるわけである！

## (2) テレビドラマが再確認させてくれた「学校」の意義?!そこに示唆されているものは？

ところで、現在、NHKで、「宙<sup>そら</sup>わたる教室」というドラマをやっている（総合の「ドラマ10」枠／10月8日より）！面白いので（と言うより、考えさせるものであるのか？）毎回見ているが、このドラマのことを少し知りたいと思って、背景等をネットで調べてみた！

そうしたら、これは、「伊与原新」という人の同名小説をドラマ化したものであることが分かった。しかも、この小説は、2023年10月20日に文藝春秋より刊行されたもので、第70回「青少年読書感想文全国コンクール」の課題図書（高等学校の部）でもあるということであった（確かにね!）。

しかるに、この小説は、大阪府の、とある定時制高校（二つの高校？）の科学部の生徒達の実話からのアイデアを得て書かれたものであるらしく、年齢も、抱える事情もさまざまな生徒達（当然そうであろう？）が、2017年の科学研究の発表会「日本地球惑星科学連合大会・高校生の部」で優秀賞を受賞し、彼らの実験装置は意外な人物の目に留まり、「はやぶさ2」の基礎実験に、科学部として参加する想定外の事態もあつたりとか！

まさに、この実話に着想を得て生まれたのが、この「宙<sup>そら</sup>わたる教室」であるようである！そして、一方、このドラマの方は、「胸熱の感動小説『宙わたる教室』を、窪田正孝さんを主演に迎えてドラマ化！」したもので、「あらすじ」として、「東京・新宿にある定時制高校。そこにはさまざまな事情を抱えた生徒たちが通っていた。

（ディスレクシアによる）負のスパイラルから抜け出せない不良の男子生徒。授業についていくことを諦めかけた、フィリピン人の母と日本人の父を持つ女子生徒（高校生の娘を持つ母親）。起立性調節障害を抱え（リストカッター）、保健室登校を続ける女子生徒。青年時代、高校に通えず働くしかなかった男子生

徒（団塊の世代→いわゆる「集団就職組（金の卵）」）。

年齢もバックグラウンドもバラバラな彼らの元に、謎めいた理科教師（窪田正孝）が赴任してくる。彼の導きにより、生徒らは、教室に『火星のクレーター』を再現する実験で学会発表を目指す、自身が抱える障害、家庭内の問題、断ち切れない人間関係など、様々な困難が立ちはだかり…」（一部加除修正した）とある。

ちなみに、「原作者である伊与原新さん自身、学生時代にお世話になっていた教授から聞いた定時制高校の科学部の話がきっかけにこの小説を書かれたそうで、ご本人は実話から着想を得たフィクションと語っています」ともあるが、改めて、ここで示されている様々な青春模様、否、人生模様が、演者の名演技も伴って、というか、私にはとても身につまされるものばかりであるので、エンタメドラマを遥かに超えて、鋭く私に迫ってくるということである！

極論すれば、それは、先の「3T」の意義をリアルに感じさせるものであるということである！学ぶということ、つまり「3T」を得るということは、ある場所、ある関係があれば（もちろんそこには指導する人がいる！）、誰にでも、どこにでも出来し、それが、それこそ「人生」における重要な契機となり得るということである！

**(3)でも、やはり「学校」だけでは無理なのだ！限界があるのだ！であれば、どうしたらよいか?!**

ということで、「学校」というものは、そういうところであり、その存在意義は、とてつもなく大きいということであるが、しかし、その場や関係は、最早特別な「定時制高校」にしかない?!もちろん、そういうことではないであろうが、そうした事実?が、なかなか見えにくくなっているのが、残念ながら、今の学校の状況でもある?!

だから、それが、ここでは、「定時制高校」という、ある意味特別な（社会的に不利な?）学校ということで、皮肉にも?そこで実現されていることが、一際賞賛されるものともなっている?!つまり、そこには、半ば逆照射的に、大切な「教育と学習の関係」が浮かび上がらされているとも言えるのである?!

しかも、その先生は（周囲の、他の一部の先生も?）、その指導方針というか、教育に対する考え方が、はっきり言えば、現在の、普通の現場の先生とは違う（実話では、どうだったのかは分からないが?）?!その意味で、新しいタイプの、ある種のヒーローとして描かれている（それらしく見せていないのがミソでもあるが?）?!

否々、かなり長くなったが、ここでの論としては、そういうことはどうでもよいのである?!これまでも、数多くの学校（教師）物語はあったし、その都度、その感動や問題提起は、社会において共有されてもいる（ヒーロー/ヒロインへの賛否も含めて!）?!

だから、ここで再確認したいのは、今の教育現場（学校）は、「3 T」の意義を実現させるには、甚だ厳しく（様々な工夫・改善が重ねられたにも拘らず？）、その役割さえ放逐しようとしているのではないかということであり、もし、そうであれば、別の方途（回路）を、新しく創り出す必要があるということである！

そのことを示唆するものが、本ドラマであり、その形を自らの手で実現しようとしている（きた）のが、先の渋谷区（「探求学習（総合的な学習の時間）」の一括午後実施）、長野県泰阜村（NPOと村の共同体化）やN市H公民館（学校への一部常駐化）の取り組みだということである（31と30）！

要は、「学校」だけでは無理なのであり、限界があるということであるが、それは、「最早学校には、そうした役割（機能）は不要である！」とか、あるいは「そういうことは、他の特別な教育機関や組織に委ねるべきである！」というような論にはならないということであり、逆に、その役割さえ放逐しようとしている？学校に、新たな活力とやり甲斐を、もう一度生み出させるようにすることが重要であるということである！

何故なら、どんなに苦境に晒されても、かの「3 T」を実現させる場としては、学校が、一番その可能性（潜在能力）を有していることは間違いなく（それがあがりなくなりということでもあるが！）、それを生かさない手はないということである！言い換えれば、それを失くしたら、最早学校ではないということでもある（それこそ、ロボットや、その他のICT技術だけで事足りるということである？）？！

最早、明らかであろう！やらなければいけないことは、学校のもつ「3 T」の役割（機能）を、家庭や地域の協力を得て復活、再生させることである！それしかない！

だが、現状は厳しい！では諦めるか？しかし、そうなっては、ますます事態は悪化していく?!もちろん、これまでも、そうならないために、数多の対策・対応が為されてきたとは言える（近年のCSや地域学校協働本部事業等は、その最たるものである!）?でも、なかなかうまくいかない（例えば、かの不登校数は過去最高となっている!教職員の病休等もまた!）?

実施数自体は増えているが、その成果がなかなか見えない?!やはり、お手上げなのであるか?否、そうではない!上に挙げた取り組み以外にも、その可能性は示すものは無数にある!ただ、そこには、それを実現しようとしている人間が、たとえ少数であっても、必ずいる!そして、彼らが、多くの仲間や理解者を得る!そこ（否、そここそ!）が重要なのだ（今回は、あまりそのことには言及出来なかったが!）!

（つづく）

33 「教育協働」の眼目（ゴール）は、「普通の上等」を作り出していくことで  
も?!

(1)「統一（性）」と「多様（性）」のゆらぎ、否、対峙？改めて、それが示唆  
するものは?!

とにかく、現状の「教育」が、学校教育、社会教育共に（「家庭教育」もだが!）、  
その力を十分に発揮することが出来ず、その機能そのもの（極端に言えば、存在？）  
が危うい状態に陥っていることは間違いない（ということは、社会全体の  
危機だということでもある!）!

もちろん、その原因は、関係者が手を抜いたり、責務を放棄したりしたから  
ではない（一部？そのようなことがあるのかもしれないが、全員が精一杯頑張っ  
てきたのではある!）!社会全体の状況が変わり（しかも、急激に!）、既存の法  
制度や、それに基づいて手当される予算や要員配置が、ほとんどそれに対処出来  
なくなってしまうということである!

かつて、それを予見し、超克するために（これは、真実である!）、「生涯教  
育（学習）」の理念（「急激な社会の変化」＝「少子高齢化」「国際化」「情報化」及  
び「成熟化」への対応→「生涯学習体系への移行」→学校教育の再編+学校外・後教  
育の充実）が提唱されたわけであるが（ちなみに、我が国では、このような枠組み  
でなされた!）、ある意味それが、再び（否、今となってはギリギリのところまで  
追い込まれて?）、そして、形を変えて必要とされているということである（キ  
ーワードや括り方は変わったが、本質は変わっていないということ!）!

しかるに、これまで、その時々関係者の熱意と努力によって、様々な施策  
や方向転換も進められてきたとは言えるが（数え上げればキリがない程に!）、  
残念ながら、その甲斐もなく（こう言えば、関係者に叱られるかもしれないが!）、  
学校教育では、いじめ・不登校等の増大、教職員の疲弊・成手不足、社会教育  
では、予算の逼迫、行政上の不整合、関係諸団体の衰弱（特にPTA?）等が  
進んでおり、とてもじゃないが、この大きな課題に対応するだけの力がない（思  
いはともかく?）?!

だから、私自身は、改めて「教育協働」という概念（行動イメージとでも言  
うべきか?）を提案し、学校教育・社会教育双方の関係者の、新たな連携・協  
力の形を構築しようと呼びかけてきたわけであるが、なかなか力強い歩みは見  
られない（個々の課題対処で精一杯である?ただし、局所的、散発的には、それに  
相当する姿・形が作られている／つつあるとは言える!）?!

ということで、ここでは、かねてより主張している、制度／取り組みの「統  
一（性）と多様（性）の相剋?」という観点から、改めてこれから必要となる  
「教育協働」の最終ゴール、否、実際は「眼下の目標」（多くの人が、無条件に  
賛同、共有できる目標）のようなものを提唱しておきたいということである!  
要は、多少我田引水的是であるが、私の主張する「教育協働」の最終ゴール（眼

下の目標)が共有出来なければ、事態は、なかなか好転しないということである(個別の課題への対処で、それぞれは精一杯ということ!)!

実は、その鍵を握っているのが、意外と思われるかもしれないが、「普通」というものの存在意義であり、その価値を維持する(否、高める!)ことの必要性だということである!現在、「多様性」の主張、裏を返せば「統一性」の弊害の指摘が多方面に亘ってなされているが、そこにある多くの人の努力の成果、すなわち「普通」(の質)へのまなざしが、そこで見失われているのであれば、それこそ本末転倒となるからである?!

## (2)「正規分布曲線」からみた「普通」の意義!軸を右側に動かす力(場や関係)、それが必要なのだ!

どういうことかと言うと、人間の能力(否、ある状態)は、全体としてみれば、どんな局面においても、高い(良い)とか、低い(悪い)とかというような状況分布になる!つまり、みなが同じ能力(状態)を有しているのではないということであるが(もちろん、様々な条件/努力の違いにより、その差が出て来るわけであるが!学力などというものは、その顕著な例である!)、いずれにしても、通常は、その真ん中の数が最も多いということになる(いわゆる「正規分布」!それが、正常ということでもある!)!

だが、その数が最も多いということをもって、「大多数→普通」ということにもなる!言葉のニュアンスはともかく(ただし、これが曲者なのではあるが!),その存在は、それ以上でも、それ以下でもないのである!それが、自然の摂理であり、そのことを卑下したり、自らを委縮させたりすることは無用なのである!それよりは、その「普通(大多数)」の質が劣化しているということがあれば、その「劣化」こそが問題なのであるということである!

そこで、その具体的なイメージをもってもらうために、かの数学上の「正規分布曲線」を用いて説明すると、通常のは、座標のY軸を軸として左右対称の山形の曲線(真ん中が高く、両端が低い)が描かれる!そして、それは、おそらく人間の状態や行為の結果を示す場合は、ほとんどが、その「正規分布曲線」をなす!もし、それをなしていない場合は、何かが異常であったり、何らかの作為が働いていたりということになる?!

その具体例は、ここでは示すことはしないが、要するに、問題は、その正規分布曲線がいびつであったり、そもそも山形となっていなかったりする場合である!例えば、その山がどちらかの極に偏っていたり、極端な場言は、ニコブの山が、それぞれの象限にあたりする場合(二極化)である!

尤も、実際の結果は、すべて理論通りにはいかないのが、そのそれぞれの結果については、その原因説明や対処法等が、個別に措置されればよいのであるが(そのままでもよいものも、当然ある?テストの結果等?)、私がここで問題として挙げたいのは、「ニコブ山(二極化)」と、もう一つは(こちらの方が、より深

刻！)、一見、正規分布を成しているが、実は、その個々のスコア（絶対数値）が、全体的に下がっている場合である！

視覚的には同じであるが、軸となっているY軸の座標自体が、左にズレているということである！ただし、この場合にも、最も多い部分はある、それが、大多数（普通）ということになる！だが、明らかに、普通の「質」が落ちている！だから、全体としてもそうであるが、人数が多いということだけで、その評価をしてはいけないということでもある！そして、やはりそこが、最重要問題ともなるということである！

ただし、たとえそうであったとしても、それ自体を、すぐに何とかすることは難しい！しかも、それを、ある特定の結果だけで論壇することは、かなりの誤解を招く?!しかも、そもそも数値化することの出来ないものも多々ある（アンケート調査等も、そのそしりは免れない?!）！

何を言いたいのかというと、ある特定の結果や傾向に目を向けることには限界があるということであり（混乱も招く?!）、それよりは、これだけは、すべての人にとって重要であり、そのことを、より注視することが必要だという意識を共有することが重要であるということである！

そして、それは何かというと、グラフで言うなら、みんな、Y軸を右に移動させていく力が必要だということである！しかも、その力の鍵を握っているのは、まさに山にいる（普通ということになる）人達の意識や努力ということになる（それが、最後には、全体を押し上げる力となるからである!）?!

### **(3)「普通の上等!」、「精一杯の普通!」、それを大事にする社会が健全な社会であり、重要なのだ!**

ところで、かつて私は、沖縄の泡盛の商業で、「この商品は、『普通の上等!』という謳い文句」を聞いて（見て）、何故か、ほのぼのとした気持ちになったことがあるが、そうなのだ!この「普通の上等」がいいのだ!改めて、そう思うのである!決して自己嫌悪でもなく、僻みや妬みでもなく（多少自虐的かもしれないが?）、そのように言える、振舞えることが大事なのだと思うのである（売り上げが上がったかどうかは分からないが、ある時ちょっとしたブームになったことは事実である?!）!

とは言え、やはり、普通は嫌だ!みなと同じは嫌だ!違っていたい!もっと上になりたい、自分の個性を発揮したい!etc.様々に、人は思う!そして、挙句の果てには、そのような言動が取れる人は、そういう境遇にはない、つまり恵まれている人だと、そのように思うのかもしれない（多分、それは、ある意味当たっているのかもしれないが?）!

しかるに、その気持ちはよく分かるし、それを社会に向かって大声で叫びたいということも、同様によく分かる!貧困とか、障がいとか、差別とか、挫折とか、耐えきれない仕打ちや苦痛を被った人であれば（否、逆に、そうしたこ

とを加害者として行った人は?)、なおさらかもしれない?!そして、その延長線上で、個々の個性(多様性)を伸ばす、活かすということが、健全な社会の目指すべき方向性だということも、よく分かる!ただ、それは、多くの人の「普通」を無視する、さらに言えば、その普通を壊すことであってはならない!

「学びの多様化学校」とか、様々な方途による「学びの多様性」の保障は、その普通を享受出来ない(努力しようにもそれが出来ない)人にとっては、社会が、全力を挙げて成就しなければいけないが、それが、かの「負の連鎖」によって、「普通」の質の低下を惹き起こすのであれば、元も子もない?!

ちなみに、ここで言う「負の連鎖」とは、どんな集団でも、その内部力学として、例えば「出来る子、出来ない子」というような序列が出来てしまうということであるが、下手をすると、新たな正規分布曲線を増やしてしまうだけに終わるかもしれない?!

もちろん、それで、短期ではあっても、救われる人が多ければ、それでよいのかもしれないが、全体としてみれば、必ずしもそれが得策とは言えない?

要は、長い人生の中で、それぞれが、自分の人生をどう生きるのか、どういう知識や技能を身に付けて、社会の一員として活躍できるのか?そういう視点でみていくと、多様性の過度な主張は、却って社会に混乱や分断を招く!

しかも、多くの「普通」の人の力を、削ぐことはあっても、それを伸ばし、活かすことが出来なくなる?!余談だが、いわゆる無党派層や「我、現実社会とは無縁なり!」といった人々は(実際には半数近くいる?)、おそらく、その「普通」に愛層をつかした人か、裏切りを重ねられた人かもしれない?!

これもまた、何を言いたいのかということであるが、大事なのは、各自の多様性(もともと人はみな違う!)を活かしながら、全体として成り立っているもの、すなわち「統一(性)→普通」を大切にしていくことだということである!そのためには、一人ひとりの自覚と努力が必要であり、とりわけ大多数の「普通」の人の振る舞いが重要だということである!

だから、為政者(学校の先生も!)には、その多くの「普通」の人間(生徒)が、ちょっとでもいいから、頑張ってみよう、そう思えるような施策(場や関係)を手当てすることも(が?)必要なのである(声の大きさや一過性の「流行」の部分に翻弄されてはいけない?)!これが、Y軸を右に動かす力となるわけである!「普通」が頑張れば、全体が変わる!その力を、学校教育と社会教育の協働(教育協働)によって、生み出そうということなのである!

(つづく)

34 第 45 回「日本生涯教育学会」大会に参加して！今回は、意外な収穫もあった？！

(1) まずは、その前に、驚きの事実が！

別コーナー（新通信「岳陽と共に」第 41 号）でも触れたように、過日（11 月 30～12 月 1 日）、「日本生涯教育学会」第 45 回大会に、オンラインであったが、参加した！

一時期（相当な期間）は、この学会大会（通常は 11 月末、原則、東京上野にある「国立教育政策研究所社会教育実践研究センターで実施）に直接出向くのが、私の、年間を通しての一番の楽しみであったが、いつのまにか、このような参加となってしまっている（5 月の、福岡県立社会教育総合センター行われる「中国・四国・九州地区生涯教育実践研究交流会」もそうである！しかし、こちらは、いまでは参加さえしていない！）！

月日の流れを、つくづく感じさせるわけであるが（尤も、単なる物理的な時の流れでもないものもあるので、真に複雑な心境ではあるが？）、それはそれとして、ここでは、いくつか取り上げたいことがあるので、改めて、備忘録的に？書き記しておきたい（大会関係者や登壇または発表者には、標題のような言い方は、甚だ失礼だと思いつながら？）！

ただし、残念ながら、もう既にかかりの日数が過ぎてしまっているの、その時の昂奮や感想は、かなり減衰してしまっている？思えば、まだ 3 週間前の話である！何とも情けない、元研究者？、否、単なる往生際の悪い高齢者ではある？！

まあ、そんなことはともかく、まずは、上記「別コーナー」では、「今回は、とても面白い発表を聞かせてもらった！なかでも、私が、35 年前前後に勤務していた国立教育政策研究所社会教育実践研究センター（当時名：国立社会教育研修所／愛称「国社研」）の発表には、とても驚かされた！まさに、隔世の感、ここにありということであったが、その取り組みには、甚大な意義と可能性を感じさせてもらった！」と書いている！

そして、その理由として、「と言うのも、そこでは、現在『BuRaLi（ぶらーり）e 上野』というものが行われており、これまでは、調査研究や関係者の研修だけで、その機能を果たしてきたセンターが、その枠を取り外して、近隣の人々や学校（高等学校）と協力して、新たな役割を構築しようとしているからである！折角の機会でもあったので、少し質問をさせてもらおうと思ったのであるが、時間がなくて、結局は出来なかった（非常に残念である）！」ともしている。余計なことだが、これは、オンライン参加の悲喜劇でもある？

さらには、「要は、その取り組みが、いわゆる『国策（総合教育政策）』として、どのように波及していくのか？ということであるが、単なる、センターの生き残り策で終わるのではなく、同センターの研究・研修事業に、どう生かさ

れるのかということである！

ちなみに、そこ（「地域学校協働活動」）での大きな課題は、かの『教育課程』にどう絡ませるのかということであるが、それが、うまくいかないと、学校側にとっては、負担の大きいものとなる（しかも、現在、その学校側は、かの「働き方改革」の真っ只中であって、そうしたヴィジョンを失おうともしている？）！だから、社会教育側が、どんなに熱意をもって協働、協力を呼び掛けても、迷惑な話となる?!そのことを克服するためにも、この動きは重要なのだ！」としている。

また、最後には、「ということで、今回の学会参加では、改めて、様々な情報提供や示唆を受けた！現役をゆうに退いた身ではあるが、この恩恵？を、是非とも、今付き合っている人達に伝えない方はない（特に沖縄の人達に！主として『教育協働アカデミー』を通じて！）！そしてまた、その辺りのことを、広く『新・教育協働への道』で語っていくことにしたい（目腰脚を気にしながら?!）」と結んでいる。

まさに、この結びを受けて、ここでの執筆を始めているわけであるが、現実には、真に厳しくて（否、寂しくて?）、まだまだ、そのようなことを喋り合う人や機会も、ほとんどない（過日のズーム交流「教育協働アカデミー」で、一方的に紹介したことはしたが!）。だが、これが、今の現実なのだから、仕方がない?!

## (2) フォーラム／研究・事例発表について

ということで、取りようによっては、何とも複雑な心境の吐露で始めたが、とにかく、ここでは、その時の思いやいくつかのアイデアを、可能な限り思い出しながら、書き留めるだけということになる！

そこで、最初が、「生涯学習政策研究フォーラム」ということになるが、テーマは、「社会の変革は生涯学習に何をもちこたすか～GX推進による価値の転換と生涯学習～」であった。登壇者は、西明夫氏（文部科学省総合教育政策局生涯学習推進課）、鴻上哲也氏（伊万里市図書館）、澤野由紀子氏（聖心女子大学）、そして、コーディネーターは、佐藤裕紀氏（新潟医療福祉大学）であった。

大会プログラムに示された「概要」には、以下、「現在、政策課題として、GX（グリーントランスフォーメーション）、DX（デジタルトランスフォーメーション）、持続可能性、生物多様性、社会的統合、平和構築などが世界規模で取り組まれています。これらの進展は、社会的に見れば未来に向けて社会全体（仕組み、関係性、価値）の変革を目指すものであり、人に視点を当てれば一人一人の価値観の変容と意識及び行動の変革を求めるものであります。

このフォーラムでは、世界的に多様な分野で展開が見られるGXに焦点を当て、GX推進が生涯学習とその推進にもたらす未来像を考えます。GXは、気候変動対策や脱炭素社会の構築を目指す国家的、かつグローバルな課題（チャレンジ）であり、多くの国でクリーンエネルギー政策や経済成長の戦略として

位置付けられています。

一方、これは人々に家庭、職場、社会のすべてにおいて環境に価値を置く意識と行動の変容を求めるものであり、これからの社会を担う人材育成を見据えた教育や学習に与える影響は計り知れないものがあります。本フォーラムでは、国内外におけるGX推進と生涯学習に関連する政策、実践、研究を俯瞰し、GX推進と価値の変換に果たす生涯学習の将来像を議論することにします。」とある。

もちろん、テーマ設定の趣旨や、その適宜性については、まったく異論はないし、その意義は大きいことは言うまでもない！ある意味、本学会においては、その理論的リーダーシップを、積極的に取っていかなければならない課題と言えるであろう！

ただ、内心では、一方の？「教育の危機？」（学校教育、社会教育共に？）がある中で、このような課題に、関係者（とりわけ学校の教師？）がどのように対処できるのか？そして、そのことに対して、本学会（「生涯教育（学）」）がどのように貢献できるのか？そういうことである！

ちなみに、文科省の西明夫氏のタイトルは「いま求められるGXとは」で、例の「リスキング」の重要性を、鴻上哲也氏は、「公共図書館におけるGX推進」ということで、自館の「カーボン・ニュートラル・ライブラリー構想」の経緯を、そして、澤野由紀子氏は、「欧州におけるGXと持続可能な発展のための生涯学習の取り組み」ということで、かのEUの取り組み等を紹介された。

それぞれが、貴重な情報ではあったが、特に、澤野氏の、フォーマル、ノンフォーマル、インフォーマルという、教育の三層構造的視点からの課題把握の指摘には、まさに本学会ならではのものと、密かに拍手を送った次第である（もちろん、誰も気付いてはいないが！）。

### **(3) 改めて、今回の収穫について**

ところで、改めて、今回の収穫について述べると、研究発表自体では、自らが選んで参加した部会（ブレイクアウトルーム）の発表が、やはり面白かった！私の古巣の「国社研」のみなさんの発表は、冒頭に書いているので、その他のものを挙げると（タイトルだけだが）、

「長期自然体験活動が未来を拓く力を育む～福島復興支援事業なすかしドリムプロジェクト11年間の追跡調査からわかること～」 「学校運営協議会制度の導入による地域住民の意識の変容～地域による不登校支援に向けた“大人の学び”を生かしたサポーター制度の構築を通して～」 「社会教育主事の力量形成に関する質的検討ーインタビュー調査を踏まえてー」 「教養・健康・夢を育む生涯学習の推進～16年目となる西郷単位制総合大学の実践から～」 「ウェルビーイングとデモクラシーを育む学習都市・学習コミュニティーに関する比較研究…スウェーデンとフィンランドを中心に」（※前2者は、「生涯学習実践事例研究部会」での発表。

そして、その内の前者が、予想通り、「会長賞」となった!)であった。

とにかく、多種多様なみなさんの思いと実践の積み重ねが、最近ではほとんど触れることのなかった私にとっては、何とも懐かしく(羨ましく?)、頑張っている人は、本当に頑張っているのだなあ、つくづく思ったわけであるが、今回は、特に、国社研で仕事をしていた人達(都道府県派遣教員)の研究(実践?)発表に、その先駆性?と、何故か嬉しさを感じた!

私も同じであったが、そこでの経験は、その後のキャリアにとって大いなる財産(力)となるということである!今後も、いろんな人が、そこで活躍されて欲しいと、改めて思った次第でもある(今からでも遅くないので、是非〇県の誰かが行ってくれたらなあ?)。

来年もまた、同じ時期に、同じ場所で開催されるようであるが、果たしてそれに参加するのだろうか?一応は、既にリタイア組となっているので、参加するにしても、おそらくは、再びオンライン参加となるのであろう?!

ちなみに、終わってから、知己の、雑誌『社会教育』の編集長Kさん(彼も、オンライン参加であった)に電話をして、私達なりの総括を楽しんだが、私には、やはり永遠の?不満が残る?

それは、「社会教育」と「生涯教育」の、さらには「生涯学習」との違いや関係が、あまり参加者(会員)には意識されておらず(個人的にはあるのであろうか?)、様々な分野・テーマの発表があるのはよいのであるが、何か本学会としての研究成果全体の独自性みたいなものが、今一つ希薄のように思えるということである!

これについては、これまでも随分主張してきたつもりであるが、それは、やはり次の世代の人達の課題であり、個々の理論構築や研究成果が、その時々々の現場実践に大いに役立つものであれば、それはそれで十分なのかもしれない?!要は、それらが、現場の人達の力強いエールとなれば、それでよいのである!

とは言え、今は、「教育を救え!疲れ果てている教師を救え!一生懸命に頑張っている、名も無き社会教育関係者(地域の人々)にエールを送れ!」、それだけが、私の言いたいことである!ただし、それは、何度も何度も繰り返すように、これまでのような発想やしくみでは、なかなかうまくいかない!

改めて言えば、家庭教育的なもの、社会教育的なもの、学校教育的なもの、これらが、大きなリンクをなす必要があるということである!「生涯教育」は、そのための理論であり、実践の手立てでもあるのである!

(つづく)

### 35 “保育園留学”！またここに、新たな形（意義と可能性）が見える?!

(1) 様々な要因（ニーズ）が結びつき合い、実現されている「ひとづくりとまちづくりの循環」?!

過日、偶然ではあるが、興味沸くテレビ番組を観た。それは、「ようこそ！ちいさな留学生たち～世界遺産 石見銀山の保育園で～」というものであったが、「保育園」にも、とうとう「留学」制度？が登場しているということであった。

もちろん、これを「留学」と呼んでいいのかは、多少の違和感はあるが、いわゆる「山村留学」といったようなことは、以前から言われ、実施されているので、それはそれでよしとしなければいけないであろう?! しかも、後でも触れるように、実は、その用語には、「特許」（登録商標）までついているのである。何という状況なのであるだろうか！

そこで、まずは、そのテレビ番組であるが、それは、第33回FNSドキュメンタリー大賞ノミネート作品（制作：TSKさんいん中央テレビ）であった。ネットで、その番組のことを調べたら、「旅行でも、移住でもない。保育園留学」ということで、

「待機児童に保育士不足。少子化対策や女性の社会進出のため無くてはならない保育園だが、現場は課題が山積している。その解決の糸口になるかもしれない取り組みが始まった。1～2週間、都市部の子どもたちが地方の保育園へ通い、保護者はリモートワークで仕事をこなしながら、家族で地方の暮らしを体験するという『保育園留学』だ。既存の一時預かり保育制度と宿泊をパッケージにしたプログラムとして提供される。都市部と地方の新たな交流の形だ。」とあった。

そして、この番組的には、「石見銀山のまちの地域ぐるみの子育てが、保育園留学で全国とつながる。まちの未来が変わる。」ということであったが、改めて、「島根県大田市大森町。世界遺産・石見銀山があり、町並みには江戸時代の面影が色濃く残る。昔から変わらない、ゆるやかな時間の流れるこのまちで、ある変化が今起きていた。

全国的に少子高齢化が叫ばれるなか、震災やリモートワークの普及の影響もあって、この地域では子どもの数が増えているのだ。子育て家庭を支えるのが、まち唯一の保育園・大森さくら保育園。一時は園児が2人と存続の危機に直面したが、今では26人に増えた。

こうしたなか、園を運営する社会福祉法人の理事・松場奈緒子さんが2023年に導入を決めたのが、全国で展開され始めた新たな取り組み『保育園留学』だ。」とされている。

さらに、「世界遺産のまち・大森町に、都会からちいさな留学生たちが次々とやってくる。聞くと、普段過ごしている保育園は高層ビルの一室

で園庭がないという子も多かった。ここ大森さくら保育園は、園庭はもちろんのこと、いわば地域全体が保育の場で、あるがままの町並みも豊かな自然も子どもたちの遊び場だ。」

「大森町では戦国時代から江戸時代にかけて、銀の採掘、運搬などのため人が行き交っていた名残りか、外からやってくる人々を受け入れる風土が根付いているという。『ずっと前から住んでいたような感覚』『おかえりと迎えてもらえた』と、保育園留学で訪れる家族たちは居心地の良さを口にした。石見銀山は時代を超えて、今度は子どもたちを受け入れる場所へと変わろうとしていた。」ともある。

最後には、「やってくるちいさな留学生たちは最初、緊張もするけれど、すぐに打ち解け、まるでずっと前からこの住人だったかのように馴染んでいく。そして大森町の子どもたちと都会地の子どもたちに今まで無かった交流が生まれ、無意識のうちにお互いが刺激となり成長していく。

この出会いが、子どもたちやまちの未来をどのように変えていくのか。ちいさな留学生たちが秘めている、大きな可能性とは。」とあった。まさに、そこには、「ひとつくりとまちづくりの循環」の新しい形が実現しているわけである?!

## (2)やはり、「思いのある人(達)」が創るのである?!

ところで、記事には、その番組を制作した、ディレクターの山下桃氏(TSKさんいん中央テレビ 地域創造ビジネス部)の言も載せられている。「“子どもは宝”。私自身2人の子を産み育てるなかで、親としてその意味を実感してきました。我が子に対する何ものにも代えがたい愛しさは、遙か昔から不変のものとして語られてきましたが、深刻な少子化が問題となる昨今、この言葉の持つ意味は広がりつつあるかもしれません。自身の子であるかどうかに関わらず、地域の、国の未来を担う貴重な人材としての”宝”であるためです。

石見銀山のおひぎ元・大森町は、人口400人ほどの小さなまちで、住民たちはお互いに名前呼び合います。自然体で相手を受け入れ、大切に作る空気感。それがちいさな留学生たちにも伝わっている様子が、取材を通して見えてきました。日本全体で抱える保育の課題を一挙に解決することは難しくとも、島根県の山間のまちからヒントを示すことはできます。希望と可能性にあふれた保育園が、ここにはありました」とあった。

すべて丸写しで申し訳ないが、「一時保育と宿泊を組み合わせ、都会地の家族が1週間から2週間地方で過ごす『保育園留学』。このプログラムで、東京から石見銀山のまち、大田市大森町にやってきた3歳の男の子は、ここで

過ごすうちに『大の石見神楽好き』になりました。」とし、次のように紹介している。

「東京からやってきた弦くん、保育施設が提供する幼児の『一時保育』と宿泊をセットにして、家族で地方に滞在する『保育園留学』に参加、ここ大森町で2週間、過ごしてます。そんな弦くん、大森町に来て『石見神楽』が大好きになりました。テンポの良いお囃子と舞で、神話の世界をよみがえらせる島根県西部の伝統芸能です。

大森町に保育園留学するのはこれが2回目という弦くん。半年ほど前の留学で初めて見た神楽にすっかり魅了されました。神楽ごっこをする様子遊びながら、自然な流れで子どもたち、地域の伝統に触れています。さくら保育園の運営に携わり、保育園留学の『仕掛け人』でもある、松場奈緒子さん。このユニークな仕掛けに可能性を感じ始めています。」と。

話によると、彼女の思いと行動が、こうした取り組みを実現させたということなのである！「この地以外の子どもたちにも、この土地の魅力をフルに活用して保育を提供することで、未来が変わっていくんじゃないかっていうような、大げさにいうとそれくらいの、感覚も感じ始めました」と、彼女は述べている。

### (3) 注目される「キッチハイク」の存在！そこから見えてくるものは?!

ただし、ここまでの情報入手？であったら（感動はともかく？）、ここで、このように採り上げることもないのかもしれない？何故なら、その取り組みには、ある大きなシステムが関わっているのである！それは、「『保育園留学』は、株式会社キッチハイクの商標です。特許取得済。（特許第7164260号「滞在支援システム、滞在支援方法、およびプログラム」）」で、

『地域の価値を拡充し、地球の未来へつなぐ』をミッションに掲げるキッチハイクは、地域と子育て家族をつなぎ、1-3週間家族で地域に滞在できる暮らし体験『保育園留学』を展開しています。子どもには心身ともにのびのび育つ環境を。家族には働きながら、子育てをしながらも多様な選択肢を。地域には、家族ぐるみの超長期的関係人口の創出や地域経済への貢献をもたらします。

2021年より北海道厚沢部町から開始。都市部の子育て家族を中心に注目を集め、全国2500組待ち(2023年3月現在)となっています。」とするものである。

そして、そこには、「保育園留学は、『どうすれば子育ても仕事もあきらめず、どちらも全力でできるだろう?』という子育て家族の気持ちと、『人口減少が進む地域が持続可能であるためにはどうすればいいか?』という地域の声が出会って生まれた、地域と人生をつなぐ新しいまちづくり事業です。」とも。

さらには、「『世界一素敵な過疎のまち』を掲げる北海道厚沢部町の認定こども園はぜるから2021年11月にはじまりました。現在約1,200組以上のお申し込み、95%のリピート希望というありがたい反響をいただきながら、全国の

自治体と公式連携を進めています。」ともある（ちなみに、現在、全国で47の園が、このシステムを導入しているようである！）。

そして最後に、「保育園は、地域ごとの多様性が映し出される場所です。山や海など自然に囲まれた園庭、地元の食文化を感じる食事、行き帰りに歩く伝統の街並みや田園風景…子育て家族にとって、すばらしい環境をもつ園がまだまだ全国各地にあります。こういった素晴らしい園に通い、のびのびと暮らすことがご家族にとっての『子育ての新しい選択肢』となるように。地域にとっても地域と家族の『長期的な関係を築く取り組み』となるように。

保育園留学がやがて文化となるような世界を目指して、取り組んでいきます。子育て世代がより人生を謳歌でき、素晴らしい地域が、これからも持続していく未来へ。みなさまもどうぞ、この新しい取り組みと一緒に育ててもらえると幸いです。」と結ばれている。

このように、保育園の「滞在支援システム、滞在支援方法、およびプログラム」が「株式会社」を可能にし、特許の対象となっているのであるが（私にしてみれば驚きの何物でもないが！）、時代は、こうしたことを求めているのである！

公共施設の「指定管理者制度」が進む中で、その運営組織の存続基盤の脆弱性を危惧している私であるが、これらのアイデアやしくみづくりの先駆性は、是非とも参考にしなければならないであろう?!何故なら、このような動きには、件のNPO法人のような、その存続そのものが難しい組織にあっては、まさに現実的な（否、したたかな？）戦略であり、時代の切実な要請に応えるものであるからである！

だが、やはり、ここには杞憂もある?!と言うのも、今は、その恩恵に浴することが出来るのは、一部の恵まれた子ども達（家族）だからである！しかし、一方で、それを受け入れる側にとっては、まちの活性化や存続につながる（先の、長野県泰阜村のように?!）！

そこが、複雑であると言えれば複雑であるが、願わくは、あくまでもそれが、「ひとづくりとまちづくりの循環」のための手段であり続けて欲しいということである！要は、それが、単なるビジネス（商品提供→収益指向）になって欲しくないということである！

（つづく）

36 (私達の)「社会教育」とは何だったのか？だが、その本質は変わりようがない?!

(1) Kさんへの返信?!しかし、これは、自らへの返信(現時点での内なる総括?)でもある!

別途書き綴っている「岳陽と共に」の記事(『新通信』第43号)の一つで、「年賀状哀歌?」という部分の最後に少しだけ触れたが、やはりそれだけでは、大変心残りでもあるので(Kさんに申し訳ない?)、ここでは、私なりの、ある意味精一杯の「心の返信」を試みてみたい!

もちろん、それは、私の、それこそ全くの自己満足ではあるが、最近の、「社会教育」を巡る状況の受け止めと、一方で、それと連動した、私の、これまでの取り組みの回顧(反芻?否、反省?)を、近いうちに行わなければいけないと思っていたので、いい機会となった(それに便乗した?)ということでもある?!まさに、これは、自らへの返信、言い換えれば、現時点での内なる総括?ということでもある!

さて、改めて、まずは件の年賀状のことであるが、「通信」の記事では、「最後になるが、H県在住のKさん(88歳。わざわざそう書いてあった!)から、『お元気でお過ごし下さいますようお祈りします。』『先生 私共が心血を注いで来た社会教育とは一体何だったのかの心境です。』という、手書きの文を添えた賀状メッセージを頂いた(正確には返信?)。実は、このKさんからのものが、ここでの書く動機となっているのであるが、人には、誰かに、最後に言いたいことがあるのである?本当に、Kさんにはお世話になった!Kさんは、教員出身の人である!」と書いている。

そして、それが、私に、一つの総括としての「社会教育論?」を強いるものになったということである?!ただし、それに類するものは、これまでも、本コーナーにおいて何度も書いてきたつもりではある(そのように受け止められていなかったかもしれないが?否、そもそも、ほとんど読まれていない?)!

まあ、それはそれでよいのであるが、問題は、「私共が心血を注いで来た社会教育とは一体何だったのか?」という問いへの答えである!だが、それは、当然人によって千差万別であり、これで良かったのだという、言わば「肯定的評価」もないわけではない?!

人々の学習意欲は高まり、多種多様な方途でもって、自らの学習を享受している人もいる!また、「社会教育」というような、小難しい?用語もなくなり、それこそ、人々は、楽しく、自由に、その恩恵を被っている?!

さしずめ、人々は、「いつでも、どこでも、誰でも、そして何でも」学ぼうと思えば、それが出来るようになっている!教養、健康、生き甲斐、仲間、そうしたものが、「生涯学習」という名の下に、活発に求められている!それでよいではないかということである?!

しかし、そうは言っても、そうした学習(「生涯学習」)を享受しているのは、

まだまだ一部の人であり（お金と時間に余裕のある人達？）、学びたいのに学べない、学ぶ必要があるのに学ばない？そういう人達が、一方でおり、しかも、「社会教育」という名で、そうした人達への学習支援、あるいは地域づくり・仲間づくりへの働きかけを行ってきた「(社会教育) 行政」は、徐々に予算も人も減らされ、その直接の担当が教育委員会からなくなったり、

あったとしても、ちぐはぐな位置づけ・名称替え（なかには、「生涯学習（振興／推進）課／係」と「社会教育課／係」を併存するところも出てきた！）が進み、挙句の果てには、その担当部署を、いわゆる「首長部局」に全面移行するところも出て来たりしているわけである（一般行政と教育行政の関係が、かなり怪しいものともなってきたということである？）！

## **(2) 教育の「全体」と、それが指し示す「役割分担の構図」をいかに受け止めるかが鍵である！**

ということで、いつの頃からか風向きが変わり、気がつけば、「社会教育〇〇」とか、「公民館」とかというものが、何か時代遅れの長物のような扱いとなり、社会教育という用語自体が、世間から、というより行政の方から無くなっていったわけであるが（併せて、「子ども会」や「青年会」あるいは「婦人会」や「PTA」といった、いわゆる地域に根差した、伝統的な「社会教育関係団体」の位置付けや存在意義が、その名称の変更等を伴って弱くもなってきた！）、

一方で、そのような動きにも、一定のメリットや意義があるので（あくまでも現実的な？）、そのような評価には複雑なものがあるが、だからと言って、「社会教育」自体がなくなってしまっているわけではないのである（その証拠？に、それを規定している「教育基本法」も、「社会教育法」も、厳然と存在している！）。言うなれば、「社会教育のあり方」が変わってきたということである！

しかるに、そんな中、最近にわかに、「社会教育の再設計」とか、「公民館の再発明」とかというような言質が、当事者・関係者の間で登場してきているようである。それらの表記には、まさに、上記のような曖昧な関係、あるいは現場実践者達が苦悩している状態を何とか払拭したい！だから、新たな形にしなければならぬ！

ただ、「再」であるので、まったく別のものでもない！要は、そこにある（見えなくなっている？）必要性（意義／善さ？）を再発見し、それらを再構築していこうという思いが込められている?! 多少陳腐な言い方ではあるが、そこに、かの「イノベーション（革新）」の企図があるということでもある?!

もちろん、いずれにしても、それはそれで、真に望ましいことであり、賞賛に値するものとも言えるが、しかし、そこには、一つだけ確認しておかなければいけないことがある?!

それは、一応長い間揺れ動き、自問自答（苦悶？）しながら、やはりそうしたものが必要だったのだという、半ば自省（回帰？）のようなものだけなのか？

あるいは、同じ「社会教育」「公民館」という用語を使いながらも、これまでとは異なった位相のものを指向しようとしているのか？そこが、問われるということである！

つまり、単なる「先祖返り」ではいけないということであるが、ただし、そこにある、ある意味普遍的な存在意義を、再び呼び戻そうということであれば、それはそれで、十分評価されるべきことであろう！

それは、どういうことかと言うと、端的には、それ（普遍的な存在意義）が、「学校教育のアンチまたはカウンター」あるいは「学校教育の（やむを得ない補完）」、少しニュアンスは違うが、「固定的な役割分担の一方」ということであってはいけないということである（特に前半の部分は、一部の関係者には強く意識された？本当の教育は、まさに社会教育の方にあるというようなスタンス？批判や忌避、そして意地もあった？心情的にはよく分かる？）！

しかし、これからの社会教育を考えるに当たっては、そのようなスタンスや役割意識ではいけない（ちょっと言い過ぎか？）！あくまでも、教育全体の中での固有の役割と、それを踏まえた、他の分野との連携・協力のしくみを、しっかりと地域の中に創り出していくことが求められるということである！

### **(3) 自分達（社会教育）が、何故「生涯学習（の推進／振興）」と名乗っているのか？そこが重要なのである！**

とは言え、そのこと自体は、かの「生涯教育（学習）論」に後押しされて、そのように振る舞い、他の関係分野にも多様に呼び掛けてきたわけであるが（「学社連携／融合」とか、「協働のまちづくり」とか）、何故か、それがうまくいかなかった（むしろ自身の存在が縮小される方向に動いた？）！

だから、「新たな社会教育？」には、それが、何故そうなったのかの原因分析と、それを踏まえた、新たなヴィジョンと戦略が求められるということである（単なる「社会教育」という用語の復古的使用、それだけではうまくいかないということ！）！しかも、それは、繰り返すようだが、過去の失地回復や自己の存在意義を懐古的に主張することではない！

では、その新たな存在意義主張の方途であるが、多少冷静に言えば、「社会教育」という用語への回帰？よりは、ユネスコの用語の方が分かりやすいかもしれない？！

それは、「ノンフォーマル教育」という呼称であるが（社会教育はこれに該当する！）、他の「フォーマル教育」（事実上学校教育を指す）と「インフォーマル教育」（家庭教育や、その他の私的教育）という関係でみた時、それらとの関係がトータルに把握できるということである（ここが重要である！）！

ちなみに、その関係は、私なりに解釈すると、高度に制度化された教育（統一性／公助性）、中程度に制度化された教育（多様性／共助性）、ほとんど制度化されていない（否、してはいけない？）教育（任意性／自助性）ということである。

ある（ただ、これらは英語であるので、一般の人にとっては難しい？しかも、「ノンフォーマル」自体は、当初は造語的であったので、馴染みも薄いかもしれない?!）！

要は、人間の集団（端的には、社会あるいは一つの国）には、この三種類（層）の教育形態が必要であり（これまでの経験上!）、その中で、教育の全体がうまく成就されるということであるが（それぞれの教育には、メリット（強み）／デメリット（弱み）、そして固有の役割があり、したがって、それらを総和的に実現させていくことが求められるということである!）、そのためには、言うまでもなく、それらを理解し、それぞれの立場、持ち場で、そのための動きとしくみづくりを行っていく「ヒト」が不可欠である！

ただ、まがりなりにも学校教育と家庭教育には、それを遂行していく専門家（最終的な責務を負う人という意味である！現状ではかなり危ういが?）がいるが、社会教育（ノンフォーマル教育）の場合は、その性格上、多種多様な人々（関連施設や事業体を含む）が、それを担うわけである（親や教師も、一面それに該当するのではあるが!）！

だが、残念ながら、そこにおける大多数の人達は、部分的な参加・参画をなすことはあっても、持続的／安定的に、しかも、それを「公共的な仕事」として全うすることは難しい！否、そうする義務もない（役職等の任期もある?）？

だから、少なくとも一定期間、それを「公共的な仕事」として担う人達（現今の「法人」等のスタッフ等）の存在状況と課題意識が、事態を大きく左右することは言うまでもない！

そして、一方で、それを支援したり、一緒に事業を行ったりする行政（関連施設の職員を含む）の人達には、そうした人々の思いと動きを真摯に受け止め、その業務を果たしてもらう必要がある（それが「地位」と「給料」を保障されている人間の責務である!）。

そこが、たとえ脆弱なしくみと予算ではあっても（これは「ノンフォーマル教育」の宿命?）、地域社会のあり様を俯瞰し、頑張っている人達の思い（情熱?）や情報を入手し、彼らとの連携・協力のスクラム体制を構築していくことが求められるということである（これがなければ話にならない?）！

それは、「ひとづくりとまちづくりの循環」を創り出す、関係分野のネットワークづくりの「オーガナイザー」ということでもある！冒頭のKさんの言「私共が心血を注いで来た社会教育」とは、まさにそういうことであったのかもしれない?!

それで、今なお、そういうことが出来ていない（否、退潮している?）のであれば、いかにして、そのような連携・協力のスクラム体制を創り出すか（再設計／再発明）なのである?!

（つづく）

### 37「教育」の要諦は、「ティーチング」か？それとも「コーチング」か?!

#### (1)「体験 VS. 知識」→「二項対立」のドグマ（教条?）から解放されない? 教育（学校）の苦悩?!

戦後、「米国教育使節団の報告」の影響（直接的関与?）もあつてか、教育（学校）の世界では、まずは、いわゆる「経験主義（学習）」（J. デューイの教育思想）が謳歌された。しかし、その方針は、徐々に改められ（這いまわる「経験主義」!）、もう一つの「系統主義（学習）」が導入された!

そして、その後は、詳しいことは省くが（ただし、実際は、ほとんど忘れてしまっている?）、学校での教育方針は、件の双方の学習方法を両極にして、あたかも「時計の振り子」のように振幅してきたとも言える（否、そう言われてきた!）。

前者が、まさに「体験」を、そして後者が、「知識（の体系）」を重視するものであるが、その正否はともかく（冷静に言うと、双方には、それぞれの利点・欠点がある!）、ここで注目したいことは、その双方が、期せずして? 交互に主張されてきたということである（もちろん、そこでの、各々のキャッチフレーズやキーワードは、それぞれ異なるが! それらは、その時々々の社会状況を反映していた?）。

しかるに、その度重なる往還は、あくまでも偶然の結果なのか? それとも、その行き過ぎを是正しようとする?、ある観念が介在しての、ある意味必然の結果なのか?

単純に捉えれば、どんな状況にあつても、どちらの要素も重要だということを示唆しているということにもなるが、ここで注視したいのは、それが、いわゆる「二項対立」の状態、交互に主張されてきたのではないかということである!

すなわち、そこには、「どちらかにしなければいけない（その時点では、こちらの方が正しい!）」というような、ある種の「ドグマ（教条?）」があり、そこから、なかなか抜け出し切れない? 教育（学校）の苦悩があつたのではないかということである（今もある?）?!

それはそれで、ある意味仕方がないのかもしれないが、そのしわ寄せ（ツケ?）として、最前線ではあるが、末端でもある現場では、その都度、その振幅に右往左往させられるということであり、ようやく慣れてきたところに、次なる（一応は新たな?）対応が求められるという、ある種の悪循環が形成されてきたということである?!

要は、その対応（変化）に苦慮しながらも、自らが納得し、周囲の理解と協力も得られるものであつたならば、それはそれでよかったのかもしれないが、実際は、そうではなかった（多くは不整合や混乱を起こし、結果的には、全体の、そして個々の負担（感）は増し、挙句の果てには、彼らは、それに押し潰されてしま

った？→疲れ果てた休職者や離脱者の増大！)?!

そこが問題であったということであるが、改めて、そうした状況は、何も現場の教職員のせい（意欲の減退やライフスタイルの変化等）ではない！

明らかなのは、現実には膨れ上がってきた、様々な大きな社会的な期待（課題）には、最早単独では応えられないということであり（制度疲労を越えた、それこそ限界？）、そのための有効な施策やシステムが求められているにも拘らず、なかなかそれがうまく実現していないということである（こうした中で、件の「働き方改革」が唱えられているわけでもある！）。

例えば、現在、SDGs という形で、全世界的な社会の課題目標が提示されているが、その実現に向けて、学校（教育）が、それにどのように関わって（変わって）いけばよいのか、そこが問われているわけであるが、それ以前に、他ならぬ、その学校が（社会教育もそうであるが！）、そうした課題目標を全面的に受けて、鋭意立ち向かっていけるのかどうか？

実際は、かなり厳しいと言わざるを得ない！しかも、そこには、例の「学歴社会（受験戦争）」の弊害も現存しており（妖怪化している？）、一方の、理解や協力を得るべき親や地域の実情も、なかなか芳しくない（悪化しているところが断然多い？）?!

「コミュニティスクール」や地域学校協働活動と言う名の「地域学校協働本部事業」等が導入されているが（本来は、双方を含めて「地域学校協働活動」と呼びたいが！）、最も喫緊の課題である、かの「いじめ」「不登校」等の減少（本当は、解消と言いたいところだが！）には至っていない?!

そんな中、再び？「コーチング」の意義や可能性が唱えられている！

**(2) 今、「コーチング」の意義や可能性が唱えられている?!そこには、何がある？**

そこで、今突然、ここで何故「コーチング」のことを持ち出すのかであるが、一つは、甚だ軽薄？ではあるが、現在放送中の、あるテレビ番組が、結構話題を呼んでおり、そこで提示されているキーワードの一つが、まさに「コーチング」とされているからであり、

もう一つは、その方法論によって、上で述べた、我が国の教育（学校）が苦悩してきた「体験」と「知識」の、言わば「二項対立」的な状況から、何とか脱却出来るのではないかと思えるからである！

それは、当然、ここで言い続けている「教育協働」の意義と可能性に関わるものであり、なかなか進まなかった、これまでの「学校教育」と「社会教育」の連携・協力（学社融合→地域学校協働活動）の足踏み状態（限界？）を突破するものと考えられるからである?!

蛇足ながら、それは、学校教育関係者への、決して余分ではない連携・協力の意義と可能性（成果）を実感させるものとなると考えるから

でもある(少なくとも、それがなかったから、なかなかうまくいかなかった？しかも、それが、目下の「働き方改革」によって、誤導させられてもいる?)?!

すなわち、「コーチング」には、他者(指導者)の存在が前提としてあるが、その支援(誘導?)は、あくまでも、その本人(学習者)の自発性や自律性に委ねられるということである!

ただし、多少通俗的ではあるが、これまでの「コーチング」のイメージは、いわゆる「スポーツ」の世界のそれであり、良くも悪くも、その内実は、極めて多種多様なものとなっている!

端的に言えば、良い指導者(コーチ)もいれば、あまり良くない指導者(コーチ)も、半ば混然一体となって存在しているということであるが、そこで大切なのは(ある意味勝敗を抜きにして?)、その指導者(コーチ)と選手(子ども達)の間の信頼関係であることは言うまでもない(もちろん、その信頼関係が、どのようにして生まれているのかということが問われるわけであるが!)?!

それはともかく、ここで述べたいことは、先に述べた「体験」と「知識」の融合の問題であり、そこにある「ドグマ(教条)」からの脱却の問題である!

何故なら、そこにある大切なものを見失わないということであるが(どちらも大切であるということ!)、それを、どうやって実現(体感)させるかである!

一方に偏るのではなく、その双方をうまく実現(体感)させる方法はないかということであるが、偶々出会ったのが(ひょっとしたら必然?)、「コーチング」という方法論であったわけである(これは、究極的には、「経験主義」と「系統主義」の融合に結びつく?!)!

### **(3)「二人三脚」の限界と落とし穴?!「教えない」ではなく、「どうやって教える」のかである!**

遅くなったが、前出のテレビドラマとは、TBSの日曜劇場「御上先生」のことである!だが、ここでは、その具体的な紹介はしない(「文部科学省の官僚が学校の先生をやる」という特殊な設定で、ドラマ展開的にも興味深い!そして、見ようによっては、単なる「エンタメ」を越えている?)!

ここで取り上げたいことは、現在、教育界(学校)で話題となっている、そして番組でも決めゼリフとなっている「教えない→考えて!」という、まさに、そのことに関わる部分である。ただし、これは、最初から一方的に答えを与えないということであって、決して教えないということではない!現に、御上先生は、「personal is political(個

人的なことは政治的なことである)」とか、「バタフライエフェクト(効果)」とか、様々なことを教えている！

ところで、「教育」は、「知育」「徳育」「体育」という、三つの要素からなるが、どの要素にも、それらは関係している。そして、そこにおいて、一方的な教える(ティーチング)ではなく、様々な回路を通じた多面的な教えを、私は、「コーチング」としたいのである(「アクティブラーニング」とは、ある意味これかもしれない?)！だが、ここが大切であるが、「様々な回路を通じた多面的な教え」とは、多くの人の意見や情報を得てということであるが、それは、一方的な「ティーチング」の部分も含むということである！

自らの自主性・自発性あるいは興味・関心によって学ぶということと、誰かの力を借りて、あるいは他者と協力し合って学ぶことの双方が必要ということであり、そうした「学び」の全体を、誰かが、責任をもって見守り(自らが教えるという部分もあってよい!)、望ましい場所(未来)に導いていく！それが、「コーチング」であり、「教育」というものでもあると言いたいのである(要は、その双方は、不可分だということである!)

現在、PBL(problem-based learning 問題解決型学習→探求型学習)が大きく唱導されているが、そこに、こうした視点(哲学?)が深く根付いているかどうか?となく、これまでは、「コーチング」と言えば、スポーツの世界のことだと思われてきたが、これからは、「教育」のすべてにおいて、こうした方法が重要となるわけである！しかも、それは、単なる「二人三脚」ではなく、言わば「多人多脚」のそれであるということである！

換言すれば、あらゆる「教育」の力で、それを押し進めていくということである！そして、学校には、その「メインコーチ」が必要となるということである！何故なら、特定の「二人三脚」だけであれば、片方が崩れれば、それで御仕舞である！スポーツの世界でも、その弊害は、数多く散見される(もちろん、その逆もある!)？

だけど、多くの人(ICTの力も含めた!)の参画を経た「コーチング」、そして、それを傍で見守る「メインコーチ」がいれば、そうした喜悲劇も、まったく違った様相となる?!それが、学校の、地域(親や社会教育)との連携、ICT活用の意義であり、可能性なのである(それを厄介な仕事、余分なお荷物と捉えていた学校が、真に変わる契機ともなるということである!)?!

最後に、ある登場人物(女性教師)が、「子ども達が変わる！それが、私の喜びであり、やりがいである！」というようなことを言っていた！まさにそれが、「メインコーチ」としての教師なのであり、決して機械(AI)が真似できない部分である！だが、それは、閉じられた関係の中でのものではなく、多くの「コーチング」との遭遇によって生まれるものであれば、さらに望ましいものとなるということである(現実には厳しいが?)！ (つづく)

### 38 教育！その「混迷」から、いかに「脱出」すればよいのか?!

#### (1) とにかく、「教育」、とりわけ「学校教育」の混迷は明らかである?!

しばらく（一か月余?）、この「新教育協働への道」での論考を止めていたが、新年度（2025年度）を迎えて、やはり何かは形にしておかなければとも思い、再び書き始めることにした。

何を書いても、各地の現場（学校教育、社会教育を問わず!）で頑張っている（奮闘している?）人達には、ほとんど私の声は届かないとは思いつつも、「教育協働研究所～岳陽舎～」と名乗り、数は少なくとも、想いを共有できる人達に、自らの意見やアイデアを提示（アピール?）している身として、何とか続けていきたい、否、そうしなければいけない?と、再び思い始めたのでもある!

だが、それはともかく、今まさに、「教育」は「混迷」の淵に立たされている?!ここでは、その具体的な表象すべてを示すことは出来ないが、それを象徴しているのが、子ども達の「いじめや不登校」（自死を含む）、そして教職員の「疲労困憊と離職」の増大である!言い換えれば、それは、教育、とりわけ「学校教育」の本質（存在意義）を根底から覆しているものでもある!

尤も、そうした問題は、あらゆる制度／組織下において、大なり小なり起きざるを得ない状況でもあるので何とも言えないものもあるが（人間関係の不具合、不適合・不適応は、生きとし生けるものの宿命?もちろん、これを、単純に正当化するつもりは毛頭ないが!）、現在は、その規模や原因の複合性において、どうしようもないところにまで至っているということである!

さらに、もう一つ重大なのは、そこにおける主役自身（児童生徒及び教職員!だが、決して主人ではない!）が、そこにいる意味ややり甲斐（演じあるいは働き甲斐?）を感じなくなっている?だから、頑張り（ちょっと不適切な言い方だが?）たくなっている?しかも、周囲が、それでよいというような風潮も高まっている?

では、そうした場所・機関は、最早必要ではないのか?そういうことにもなる?そこが、問題だということである!

とは言え、そうした問答を、ただ当てもなく繰り返したところで、それ自体では、事態は一向に進捗しない?要は、教育、そして学校は（もちろん社会教育も!）、何故必要なのか!そして、そこでは、どういう内実が必要なのか!そのことを、もう一度原点に立ち戻って、考えてみる必要があるということである!

そんなことは、分かり切っている!しかも、そのことは、憲法（26条）や教育基本法等に書いてある!そう言う人も、多分大勢いることであろう!でも、残念ながら?その実体が、うまく顕現されていないのである（そうならなかったら、こういう事態にはなっていない?）?!

では、どうすればよいのか？現行の法律や制度のやり繰りだけで済むのであれば、それをやればよい？しかし、そうしたことは、これまでに、ある意味絶えず？行われてきた！時代状況の変化に、それらがついて行けていないとも言えるが、では改めて、どこ（何）を、どうすればそう出来るのか？実は、そこが見えていない？だから、混迷は、その度を深めていくばかり？？

しかるに、こんなことばかりを言って（しかも言うだけ？）、頑張っている人達には大変申し訳ないが（否、心苦しいが！）、少しでも役に立つ考え（方途）がないものか？そんなことを思っただけで、ここでの論考ではあるので、それを以下、敢えて試してみたい！これを受け止めてもらえるかは、多少の不安もあるが、やっていること、頑張っていることの意味や方向性に対して、何らかのメール？になれば幸いである！

それは、別途書いている「岳陽と共に」でも話題にしたもの（松岡正剛『日本文化の核心』（講談社現代新書、2020年）から抜粋・編集したもの→「日本人はどのように『学び』をしてきたか」）であるが、「学び（学習）」と「支援（教育）」のあり方を、深く（もう一度）考えさせるもの（きっかけ？）が、そこにはあるということである！

## **(2) 「試験制度（受験地獄？）」を、いかに乗り越えていけばよいのか？！ 「模倣と協同（働）」の重要性！**

だが、その前に、これだけは触れておかなければならないことがある！それは、「試験制度（受験地獄？）」の存在である！いわゆる「学歴社会」の問題でもあるが、実は、この眼前の混迷は、もともとは、それに端を発することは（→幸せ獲得競争？）、衆目の一致するところであろう？！

特に、その最終段階にある「大学入試」が、その元凶ではないかということである（ただし、それは、本当は「言いがかり」だとも言えるが？）！つまり、そのことを有利に進めるために、可能な限りの早期準備を行うことを余儀なくさせ（受験至上主義）、親や子ども達に、かなりの長期間、それに邁進させ（時間や経済的、さらには心理的負担を増大させ）、そこから離脱することを許さなかった？！

それが、すべての親や子どもに、幸せで健全なゴールを与えたならば、それはそれでよかったのであるが（実際は、そういうことは不可能！詳細は省く！）、多面的で、複合的な「社会問題」（「格差社会」！「少子化」もそれに含まれる！）を産出してしまったわけである？！

いずれにしても、そうした「試験制度（受験地獄？）」（「学歴社会」）の隘路や悲劇？を、いかに克服していけばよいのかということが、改めての大きな課題となるということであるが、選抜や競争自体をなくすことは出来ない（否、なくしてはいけない！だが、不正は絶対に許されない！でも、何故起きるかは容易く分かる？）！

それは、我々人類（ホモサピエンス）が、現在のような高度な社会システム（様々な組織・事業体）を維持・発展させるためには、どうしても不可欠なツール（要員充足・確保）となるからである！

しかし、そうは言っても、入試自体（入社試験も同じだが？）は、やり方次第では、その隘路や悲劇？を、可能な限り緩和、減少させることは出来る（たとえ年一回切りであっても？が、ゼロにすることは出来ない！）？！

なお、員数をしぼるだけであつたら、それ自体は、ほとんど意味はない（面接や体験入学→仮入学で十分？ただし、それは、今のところ、せっかくある「大学入学共通テスト」の成果を活用することを前提とするが！）？！

そこで、本題であるが、問題は、それまでの学習の成果（単なる暗記や○×式の解答では得られない！）を、そこで必要とされる知識や技能、そして意欲を示すものとして、いかに正当に受け止めるかということである！

その一つの試みが、かの松岡正剛氏が指摘した（残念がった）、大学入試改革での記述問題の導入（「高大接続プロジェクト」の一環→教育的な一貫性と広い枠組をつくりだそうという狙い）であつたのであるが、結局は、それは見送られた（採点の難しさや現場の教師、受験生達も、記述式に難色を示したことが大きな原因とされる？）！

これについて、彼は、「日本人がかつてどんなふうに『学び』（学習）をしてきたのか、その際にどんなテキストや道具を採用していたのか、端的に言えば『読み書きそろばん』をどうしてきたのか、そのことを通して日本人に蓄積されてきたであろう学び方について考えてみよう」としたのである！

それが、まさに「模倣と協同」ということであるが、その重要性は、これからの教育（学校教育）を考えるに当たって、大いに参考になるということである！ちなみに、それは、もちろん「大学入試論」自体ではない？！

**(3)「教育」の合力（総力）を、如何にして創り上げていくかが重要なのである！**

しかるに、彼は、「世に『読み書きそろばん』とありますが、…分解して言えば「読み書き・そろばん」です。だからといってリテラシー（読み書き能力）とニューメラシー（計算能力）の習得をさしているだけではなく、またその高度化や高次化が求められているというのではなく、そういう能力を支えている人間の認知力の基本を暗示している言葉なのだろうと思います。」として、

レフ・ヴィゴツキー（発達心理学者：「学ぶ」ということの基本を解明するために数々の仮説を提案し、子供には「内的な認知道具が潜在している」ということを暗示した）の名を挙げ、「幼児や子供にひそむ内的認知道具を育むような教育こそが最も大事な『学び』の触発になるだろうということ、とくに『模倣と協同』が基本を触発している…その『模倣と協同』は民族的な心情や言語感覚に密接に関係している…日本の主だった大学試験に記述式が敬遠されたのはとても

残念なことでしたが、このことは今日の日本人の認知力が文章的ではなくなっていることを暴露したものの…」。

そして、「ここでは、なぜこんなふうになったのか…結論から先に言うと、…日本人の『読み書きそろばん』のためには、ヴィゴツキーの『模倣と協同』にあたるものがあらためて必要…。それには世阿弥の学習方法論を大きな前提にすべき…それが日本人の『学び』の根幹をつくる…ぜひともそうあってほしい…」。

世阿弥は『まねび』を稽古（古きを考える。古きは『もともと』の意）することをもって『まこと』に近づいていくことを『まなび』とした。日本では、武芸に限らず多くの分野で『道』という文字…『職人芸』や『匠の技』が強調される背景には、日々の活動の中で『守破離モデル』が無意識に回り、自己実現への思いが貫かれている」とするのである。さしずめ、現在の教育（学習）には、必要な成長・発達（一人前になること！微妙な表現ではあるが？）を遂げる中身とプロセスが希薄、否、剥落させられているということであろう？！

翻って、基本的には、私も、この論に、ほとんど賛成なのであるが、このことは、やはり、今の学校教育だけでは限界があり（無理？）、そのことを、多様な社会教育（家庭教育を含む）の場面と協同（協働）して、そうした機会とプロセスを「総合的（or 融合的）に創出していくことが有効であり、そのことがまた、地域づくりや仲間づくり、そして後継者づくりにつながるということである！

それがなければ、まさに、子ども達の不幸？や教職員の不遇は、到底払拭できないということでもある！「生きる力」「アクティブラーニング」、あるいは「SDGs」「人生100年時代」「絆づくり」「ウェルビーイング」等々、様々にキャッチコピーを提示しても、その実体を創り上げていくのは、他ならぬ、それぞれの地で生きている、多くの普通の人間（生活人）である！そして、これが今、教育全体に求められている大きな課題であるということである！

ただし、現在の想定としては、分業、役割分担と言う名の、「学校教育」と「社会教育」の壁がある！実は、そのことを自覚（自省？）させてくれたのは、かの「生涯教育／学習（タテとヨコの統合）論」であるが、残念ながら、そういうところまでは、これまでの論や施策は及ばなかった？

だが、他ならぬ、双方の教育が、多少タイムラグはあるが、それぞれ苦しんでいるのである！そして、その限界を迎えているのである?!したがって、今、改めて求められるのは、その想定（現行）の再考であり、既存のシステムの再編なのである（そういう意味では、かの「総合教育政策（局）」は、正鵠を射ている！ただ、そこに、必要な内実が伴っているかどうかは、今のところ？ではあるが!）。それを創り出していくのが、まさに「教育協働」なのでもある！

（つづく）

### 39 社会教育の「再設計」?!それは何?そして、それをどのように進めたらよいか?!

(1)実態(体?)はある?!では、何故、どう「再設計」が必要なのか?そこが示されないと話にならない?!

最初に、余談的なこととなるが、久し振りに(本当である!若干笑?)、かの『(大判)社会教育』(日本青年館発行)からの原稿執筆依頼がありそうなので、このタイトルの論考も、それを待って並行して行うつもりであったが(だから、遅れた!)、実際にお問い合わせされたテーマが、少し(否、大いに?)違ったものであったので(「社会教育の温故知新」、それとは無関係に、本論考を進めていくことにした(ただし、想いは通底している?)!

なお、依頼原稿の方は、すぐに作成し、編集部に送らせてもらっている。多少、余りにも早く書かせてもらったことを後悔しないわけではないが(失礼かとも?思ったが、分量が少なかったこともあり、一日で済ませた!掲載は8月号とのこと!)、これが私の性分(弱点かもしれない?)でもあり、仕方がない(笑)!今は、この論考に、思いの丈を注ぐしかない!そう思っている仕上げであるということである!

さて、改めて、現在、一部?の心ある人達が、「社会教育の再設計」とか、「公民館の再発見」とか、そういうフレーズで、言わば「社会教育の存在意義の再考」を行っていることは、前にも述べたことがあるし、その後も、そうした動きは活発になっていることと思う?!残念ながら、その具体は、直接には知ることが出来ないが、時代状況的には、まさにその必要性/必然性が高まっていると言わざるを得ないからである!

いずれにしても、私は、その主張/動きに対しては、心からの賛同、そして敬意を払いたいと思っているが、その意味では、ここでの論考は、それに便乗しての、私なりの「社会教育再考」(最後の?)ということになる?!最前線で活躍・奮闘されている人達への、確かなエールとなるのか?若干の不安や懸念もないわけではないが、まがりなりにも、長年関係者の一人として奮闘してきた?私なりの総括ということでもある?!

ただし、相変わらずの?理想・理念だけであれば(しかも文章が分かりづらい?)、最早要らない(もう沢山だ?)と言われるかもしれない?!だが、よしんばそう言われても、これは、ある種の私の意地でもあるので、敢えてそうさせてもらう次第であるが、ここで言いたいことは、標記のように、「社会教育の実態(実体?)はあるのに、何故、どこが、どのように『再設計(再発見)』が必要なのか?そこが示されないと話にならない?!」、そういうことである!

言い換えれば、そこに、新たな発見(再確認でもよい!)と、それを実現するための確かな方向性と方途(戦略?)が指し示されていなければ、単なる懐古・回帰主義、あるいは個別の、自分達の主義・主張だけの吹聴で終わってし

もうということである（こうしたことは、ある意味、これまでも何度も繰り返されてきたことである？）！

ということで、「教育」には、家庭教育、学校教育、社会教育の、言わば「三つの教育（形態）」があるわけであるが（ただし、これは、教育の行われている場から見た大括りの分け方である！）、「教育の現存在」という点では、これ以上の分け方はない（一応すべてをカバーしているということ！）。だが、関係者も、そこが大変悩ましいところであったが、「社会教育」だけが、「社会」というものの「茫漠（曖昧？）さ」や主体の「多様性」故に（→広狭二義）、イメージや対象領域が共有しづらい？

しかも、その特性（ノンフォーマル性、そして限りなくインフォーマル性を包摂する？）故に、まとまった形での動きが取りにくい！要は、全体としての「社会教育」が、一体何なのかの合意形成がなしづらいということである！しかも、近年では、役所（基本は教育委員会）の担当部署も、それこそバラバラとなっている（「生涯教育／学習」への包摂、それとの並置、部署自体の消失／他部署への移管・移行→社会教育の危機？とは、ある意味、社会教育行政のそれでもある？）？！

## **(2) 実態（体？）を把握（確認）すること！まずは、そこから始まる！**

そこで、まずは、「社会教育の再設計（再発見）」に当たっては、上記のような社会教育の実態（体？）、しかも、どこが、どのように危機に陥っているのかの原因を把握（確認）しなければならない！ヒト、モノ、カネ、それらの要素が困窮、弱体化しているから（しかも、その回復は望めそうもないという現状認識で）、そうなのだという表層的理解もあるのであるであろうが、そもそも、何故そのようになっているのかである（財政逼迫や、生涯学習まちづくり事業等の沈潜化によるということであろうか？）！

直近の被害・災害対応やコロナ対応等と直接比べることは出来ないが、その必要性や優先性が損なわれている（否、当初からそうである？あるいは、依然として「学校教育至上主義」である？）？！だから、そうした扱いが、当然のようにもなっている？！

だが、考えてみると、社会教育（の関係者）は、地域の問題やそこで暮らしている人々の生活の改善や向上を図るために、日夜頑張ってきたのではないか？まさに、「地域づくりと人づくり」を標榜して！であれば、その存在意義は、増すことはあっても、決して減じられることにはならないのではないか？そこで、もし、そうなっているのであれば、その標榜してきた存在意義が実現されていない？あるいは、評価されていないということにもなる？

ただし、これについては、若干思い当たらないわけではない？！いわゆる「生涯学習」が、まさに「お金と時間、つまり生活にゆとりのある人達が行うもの」というような受け止め方がなされてきたということである！例えば、「公民館」は、そういう人達の専有物ともなっていた？！

もちろん、それはそれで、善いことではあったのであるが（外部からの評価とは裏腹に、そこは、利用者の生き甲斐づくりや仲間づくりの場にもなっていた？）、やはりそれだけでは、全体の社会状況が許さなくなってしまった（税金の無駄遣いとか、一部の既得権者への厚遇とか言われた？）！

とは言え、これは、今の「社会教育の危機？」の原因の一つかもしれないが（遠因？）、やはり主因（これが、本質的には重要であった？）は、折角訪れてきた「生涯教育（学習）」の理念（教育／学習の「タテ・ヨコの統合」の視点）を、自分達の「地域づくり・人づくり」の形に落とし込むことに、結局は、結びつけられなかったということである?!ただし、この責任の半分（否、それ以上かな？）は、一方の「学校教育側」にあると、私自身は思っている?!

詳しいことは、ここでは、これ以上書けないが、当初（途中まで？）は、双方の関係者が、可能な限りの連携・協力の輪を造ろう、広めようとはしたのである（「学社連携」や「学社融合」とか）！しかし、残念ながら、その意欲も勢いも段々となくなり、気がつけば元の木阿弥状態ともなった？

ちなみに、その後「コミュニティスクール」や「地域学校協働本部事業」というような取り組みもなされてきているが（数では相当数に上っている!）、惜しむらくは、そこにあるタイムラグである！しかも、運悪く？（この表記は微妙ではあるが?）、最近年では、「学校教育側」では、例の「教員の働き方改革」が声高に叫ばれ（社会全般に亘ってではあるが!）、一方、さらに手薄になった「社会教育側」では、その荷の重さに汲々とさせられてもいる?!

**(2) 教育行政（とりわけ「国／文科省」）に求めたいこと！それは、「学校教育」と「社会教育」の合力形成が、地域社会全体で行えるようにしていくことである！**

以上、結果的には、いつものような論調になってしまったが、言いたいことは、大きく二つである！一つは、「社会教育」の範囲とその呼称の意義及び関係者間の相互理解の必要性（役割とか関係性等の確認）である！ある意味、その捉え方の問題ということになるが、強いて言えば、「社会教育と社会教育的なものの併存」（狭義と広義→これは必然！ある意味自然？）を、いかに関係者が受け止め、その良好な協力関係を築いていけるのかということである！

限りある「ヒト、モノ、カネ」（資源）の中で、「自分達さえよければ！他の所など構っておられない！」などというようなことであれば、成果は限定的となり、大きな力とはなり得ない（挙句の果ては、自分達自身が萎れてしまう？あるいは、「儲け主義」の被害者ともなる？）?!

もう一つは、学校を含めた、地域社会全体の教育力を、いかに有効に高め合っていくかという新たな視点の必要性（そこにおける「社会教育」のあり方の確認）である！現在、先述のように、「コミュニティスクール」や「地域学校協働本部事業」という取り組みが進められているが、トータルで言えば、そうい

うことも含めて、「教育の合力」を、いかにつくり上げていくかである！要は、「教育は一つ」なのである！否、そうでなければ、望ましい成果は上げられない！これもまた、「自分達さえよければ！他の所など構っておられない！」というようなことであれば、それこそ、互いが共倒れともなる?!件の「いじめ、不登校」の問題は、その象徴?でもあり、さらに、「教員の働き方改革」の課題は、まさにそれと連動している?!

まだまだ書かなければいけないことは山ほどあるが、とにかく、以上のような現状／課題認識がどのようにあるのか?そもそも、そうしたことが、何故、どのように問題、課題なのか?それについての意識やプログラム(研修機会等)、そして人材養成が、必要な形で共有／出現されていないと、話にならない?

くどいようであるが、放っておくと、それは、一部の関係者(社会教育を愛している人?)の一方的な思い(片思い?)、あるいは郷愁に過ぎなくなってしまう?一方で、「社会教育(行政)」を所管してきた教育行政のスタンス(覚悟?)が確固としたものにならなければ、関係者達は混乱(苦悩)するばかりとなるのである(批判や「恨み節」の連続では、力強い前進は出来ない?)?!明らかに、近年の動向は、それに拍車をかけている?!

最後になるが、かつて「車の両輪説」というものがあつた(今もあることはある?)!まさに「学校教育」と「社会教育」が、あたかも車の両輪の如く存在する(否、しなければいけない?)とするものであるが、ある意味では、今こそその実効策、換言すれば、「本当に説得力のある施策」が要請されるということでもある?!

もちろん、その「形や強度、大きさ」は違うが、「概念の大事さ」とその「成果の総和」という視点で見れば、まさに「両輪」であると言える!そこが、十分詰められていなかったということでもあるが(パッションだけが先行した?)、今、改めて求められるのは、その「大事さ」と「成果の総和」なのである(単純な「そうであるか、そうでないかの議論」は、ほとんど意味はない!)!

何故なら、「学校教育」を含めた、あらゆる「教育」の力の結集、すなわちその合力(総力)を、如何につくり出していくかが重要だからである!それが、ある意味「本来の姿」であるばかりではなく、現実的にも、目の前にある、限りある「ヒト、モノ、カネ、(事業)」の効果的な運用が求められるからでもある!

(つづく)

40「教育」の未来?! 厳しいが、「思いある人達」がいる限り、それは創られていく?!

(1)「教育」は、未来(理想?)を創るためにある!けれども、現在、それを担う人達が途方に暮れている?!

いよいよ、この「新・教育協働への道」も、第40号を迎えた!以前の「教育協働への道」と併せると、都合140号となる!本当に、よく書いてきたものである!ただし、その執筆間隔(否、意欲と言った方が正確である?)は、特に、この「新・教育協働への道」にあっては、ある種の気まぐれもあって(と言うより、悲嘆?否、書くことの無力感?)、一定ではない!

しかも、テーマも、その時々話題に沿ったものとはいえ、その連続性(ストーリー性→体系性)には、かなりの疑問符がある!それはそれで仕方がないのであるが、そこで今号では、折角の機会(一つの節目)でもあるので、思い切って、『教育』の未来?!と題して、これまで述べてきたを織り込みながら、そのあり様を、改めて語ってみたいと思う!

ただし、これは、単なる思い付きからではない!やはり、そのことが現在、是非とも必要だと考えるからである!要は、昨今の厳しい問題・課題状況の出現、そして、それらに付随した様々な言論、そして各地の実践事例を見ての(もちろん、その直接的な情報は、ほんの一部しか持ち合わせてはいないが!)、私なりの着想(夢物語?ロマン?)が、新たに頭を擡げてきているということである!だから今、それをまとめておきたいのである!

しかも、急がなければいけないのでもある!何故なら、それを担う人達(学校教育だけでなく、社会教育関係者も!)が、現在、途方に暮れて(疲れ果てて?)いるように思えるからである!だとすれば、少しでも彼らの力にならなければ、ここで書いている意味も、ほとんど雲散霧消する?!そう、思うのである!

しかるに、これには、私自身の切なる思いが加わっている!それは、別途『岳陽』と共に(第53号)で紹介したことであるが、一つは、最も安定した教師生活を送っている(自信をもって臨んでいる?)と思っていた教え子(N君)の話と、NHK番組(「新プロジェクトX:福井県小浜市の水産高校→現在は若狭高校海洋科学科に統合の事例」)で知らされた、一人の赴任教師の奮闘ぶり(結果的に、私の言う「教育協働」のプロセスと成果を顕現させている!)が、半ば交錯した形で、受け止められたからである!

最近では、教師の、休職はともかく(相変わらず多い!)、離職者さえもが増えていることは知っていたが(特に若い人達!)、まさか彼が、その一人になっているなんて想像もしていなかったが、聞けば、自分の仕事にやりがいを感じられない!「こんなことを、何でしているのだ?」そんな風に思う気持ちが日に日に強くなり、最近では、学校に行くこと自体が、何とも億劫にもなっているというのである!

子どもとの関係、同僚との関係も、これ以上は（かなり努力はしてきたらしい？）、改善は厳しいとも言う彼であるが、何故、彼は、こうなってしまったのか？とかくこういう状態は、いわゆる「負の連鎖」を生むものであるが、まさしく今彼は、そういう状態に陥っているわけである?!そして、自分自身を見限ろうともしている？何とも切なく、歯痒い限りなのである！

だが、一方で、福井県のような事例もあるのである！端的言えば、そこに、「心ある教師」がいたからこそ、それ（「世界初の『高校生による宇宙食開発』」）が実現したということであるが、今こそ、そうした教師の働きぶり（存在意義）に、社会（直接的にはマスコミ？）は、鋭く？目を向けて（応援→再評価？して）欲しいということでもある！

彼らの存在は、ある意味地味ではあるが（とかく生徒の方に賞賛が送られる？）、途轍もなく大きな役割を果たしているのである！

**(2) 国家／社会あるいは個々人の飽くなき欲望や暴走？を抑止するために！**

もちろん、そうした事例は、他にも多々あると思うし（事態の大小では測れない！）、しかも、地方の高校の、ある種特殊な学校（水産高校）の事例でもあるので（「地元では“最も荒れた学校”と呼ばれ、廃校の危機にあったこの高校。そんな逆境のなか、熱血教師と生徒たちが一丸となって挑んだのは、学校の伝統でもある『サバ缶』を宇宙に届けるという夢のプロジェクト」とあった！）、私が問題としている、普通の地域（生活の基礎圏域）に存在する「公立小中学校」の参考には、直接はならないと言われるかもしれない？!

が、実は、そこにある本質は、まったく変わらないと思うのである！つまり、「誰かに善くなってもらいたい！」という思い（願い）をもった、教育に携わる人間がいて、彼らの思いと実行力が、多くの人達を動かし、それによって、学校や地域も変わる！まさに、「ひとづくりとまちづくりの好循環」が生まれてくるということである！

ただし、それは、ある意味、いずれの時代、いずれの地（国）においても、限りなく理想に近いものでもある！我々人間社会は、今（否、これまでも、そしてこれからも！）、言わば、そうした教育の理想に向かって突き進んでいるはずであるが、やおら気がついてみると、その負の側面、ないしはあってはならない国家／社会の危険（危機？）に直面しているとも言えるのである！

そして、そこには、あまり認めたくない、国家／社会あるいは個々人の「飽くなき欲望や暴走」が介在しているわけでもある（それが、回り回って、「教育」の世界にまで、悪影響を及ぼしているわけである？）！近代国家（群）は、幾多の試練（苦難）から素晴らしい思想や制度を生み出したが、国民（公）教育制度も、その一つである！

しかし、今やそれも、大いなる危機を迎えているのである（自分達さえ

よければ、それでよいというような?) ?

だが、「このプロジェクトこそが、学校にとっての新たな挑戦であり、再生の第一歩…一過性のものではなく、生徒から生徒へ、15年という年月をかけて引き継がれた。…延べ300人以上の生徒がこの開発に携わる…地域に見放されかけていた学校に希望をもたらし、地域と学校の間を再構築するきっかけにもなった。

単なる宇宙食の開発ではなく、『教育は地域と共にあるべきだ』という強い理念が、現実の形として実を結んだ…熱血教師、生徒、地域の力がひとつになった青春の記録」とある！

もちろん、全体としての受け止め方、評価は、まさにその通りなのであるが、そこにあった、心ある人達、とりわけ最初の動きを創り出した担任教師が、困難な状況を、それに呼応した人達(生徒もその内の一人!)との思いの共有のなかで克服していったことを忘れてはならない！

まさに、ここが、注目される(賞賛される)ところなのである！

**(3) 改めて、そこに、どういう社会(国家)／生き方像が共有されているか？**

**要は、そこなのである?!**

ところで、「美しい国」、「楽しい国」など、時々、首相はそう言っているが、そして、「人生100年時代」とか、「ウェルビーイング」だとか、様々に言われてもいるが、それ自体は、おそらく間違っただけではなく、そして、望むらくは、そうでありたいという願いであることは言うまでもない！

だが、その具体的な姿・形とは？そしてまた、そうした姿・形を実現させるための人々の動き(組織や事業等)、そして他ならぬ財源(予算)はどうするのか？というような反論(ブレーキ?)も、もちろんあるが(これが、ある意味では現実的であるし、それを無視した考えや施策は、単なる画餅と化する!)、

しかしながら、さらに突っ込んで言えば、そうした社会(国家)／生き方の未来(理想?)像がなければ、現下の努力や苦悩が何のためにあるのかが分からなくなる？

実は、老若問わない「自死」や他者への非難・攻撃が止まない(増えている?)のは、そこに淵源があるのではないか？私は、偉そうにはあるが、そう受け止めている！

しかるに、何も私がここで言うことではないが、古今東西、実に多くの理論家／実践家が、教育のあり方について言及してきたことは他言を俟たない！それは、偏りに、人間や社会のあり方、そこにおける子ども達の未来を考えてのことである！

そして、それは、政治や経済といった、人間生活の、言わば外的条件のためではなく、思想や価値観の醸成といった、言わば内的条件(心や精神)のためである！かつて、E.カントは、『永遠の平和のために』を書き、「平和を実現

するには『世界共和国』しかない…たとえそれが夢想(Imagine)に過ぎないとしても」と述べていたようであるが、それを実現させるのは、やはり「教育」の力である！

だが、その教育の力とは、当然であるが、思いのある人達が担っているのである！とは言え、その人達が、現在、疲弊しているのである！

であれば、当然のことながら、その原因（表層的なものではなく、本質的な原因！）を抉り出し、その根本的な解決策を、しかも、困難を極めている現場の人達任せにするのではなく、言うなれば、社会全体で、その解決策（未来？）を見出していくべきなのである！

しかも、そのモデルや示唆（「教育協働」の形）は、ある意味では、至るところにあるのである！だが、それらが、うまく伝わっていない！否、それらが、うまく繋がっていない！そこが、ある意味問題なのである！では、どうすればよいか？まさに、そこが、問われるのである！

忙しい！目先の仕事をこなすだけで精一杯！やってもやっても、成果が見えてこない！喜びもない！最早、限界である！やりがいがなくなった！仕事を変えたい！様々な表現（位相？）で語られるその苦悩を、どうやって克服していけばよいのか？

多忙、やりがいのなさを、どのように払拭すればよいのか？一つは、そのやり方である！教師と生徒、そして地域の人達が、一緒にスクラムを組んで動いているのではないか（私に言わせれば、それこそが、「教育協働」の真の姿・形なのであるが！）！そこに、やはりICTの活用が加わる！しかも、それは、外部との双方向の関係による！

だが、もう一つは、これが、教育における肝でもあるが、そこには「人と人との出会いの妙」がある！その出会いによって、人は変わるのであり、その出会いを喜べるのもある（だが、だからこそ、その逆もあり得る！残念ながら、今は多くが、その方向にシフトしている？）！

いずれにしても、結局は、それによってしか、究極の解決は得られないのである！だから、諦めてはいけないのである！決して、終わらせてはいけないのである！教育、あるいは学校への期待と信頼をなくせば、その社会（国）は危うい？

しかし、それは、あらかじめ用意されているわけではない（ましてや外部から強制的に与えられるものではない！その過誤は、これまで嫌というほど見せつけられてきたし、今でも、その過誤を続けているところもある？）！それは、始終繰り返される「他者との出会い」、そして、それに「意味をもたせようとする」者の思いと苦悩から生まれるものなのである！

だから、それを、社会（国）は、温かく見守らなければいけない！それが、彼らのやりがい・喜びを実現させるのである！「先を生きる→先生」とは、そ

うした状況にある人に託された呼称なのでもある！めげるな！先生達！そして、他の教育関係者達！

(つづく)